

# 日本学童使節のイベント化とその政治的利用

是澤博昭

満州国と少女・少年

The Development of the Japanese Children's Mission into a Mass Campaign and Its Political Exploitation :  
Manchukuo and the Role of Boys and Girls

KORESAWA Hiroaki

はじめに

- ① 学童使節のイベント化
- ② 学童使節の満州国訪問

- ③ 学童使節の帰国
  - ④ 学童使節の影響
- おわりに

## 【論文要旨】

昭和七年三月の満州国建国宣言から同年九月の満州国承認までの、排外熱が一段落した時期に、日本国内で唱えられたのがアジアの融和と平和であった。そこで大きな役割を果たしたのが子供である。

子供による日満親善交流を日満両政府や関東軍は、満州侵略の正当性を大衆に宣伝するための効果的なイベントとして認めていた。さらに日本から行状のよくない移民が多数流入した満州国では、反日感情が増幅しており、国民レベルで融和をはかる必要性もあった。そこで日満融和の名のもとに、民間教育団体である全教連と新聞社が共同で主催する日本学童使節に全面的に協力するのである。

学童使節は、文相、拓相のメッセージ持参をはじめ、首相など主要閣僚、満州国の執政、国務総理、関東軍司令官等の要人への謁見や満鉄、新聞社、立ち寄り先の国内外の都市の首長や役所、在留邦人団体などの訪問にも重点を置く。そして帰路朝鮮にも立ち寄り内鮮融和をはかるなど、日満融和を唱える日本の宣伝活動の役割を担って

いた。

さらに派遣日程が、満州事変一周年と満州国承認に重なり、その関連イベントとしての要素を強め、国民的な支持を広げる。それが新聞報道を過熱させ、予想以上の相乗効果を生み出す。日本学童使節は非公式ながら、ある意味では国家的な使命を帯びた使節となり、大衆意識を国家戦略へと誘うイベントにまで成長したといえるだろう。政府や軍は、大衆社会の醜さを覆い隠す子供による日満親善交流の政治的な利用価値を認めたのだ。

さらに昭和九年初頭、日本学童使節をモデルにした皇太子誕生を祝う二つの学童使節が『大毎』『東日』と朝鮮総督府の御用新聞『京城日報』の主催で企画実行される。その方法論は、国家への帰属意識を高めるイベントへと応用され、主人公も少女から少年へと交代するのである。

【キーワード】 日本学童使節、メディア・イベント、満州国、日満親善交流、子供

## はじめに

昭和六年（一九三二）九月の満州事変を契機に高まる日本国内の排外熱は、一〇月二四日の国際連盟理事会前後に本格化し、中国から国際連盟や欧米列強にまで、その対象は拡大する。つまり「満州事変は、南満州鉄道株式会社（以下…満鉄）の線路を中国側が破壊したことによる正当防衛なのに、国際連盟理事会は、被害者である日本に満州撤兵を勧告するなど、不当な扱いをしている。」という、事実とは異なる錯覚が日本国内を支配する。そして国際的な孤立への国民の危機感が強まり、満州事変への共感と支持が熱狂的に拡大するのである。<sup>(1)</sup>

しかし昭和七年（一九三三）三月満州国建国宣言をへて戦況が落ち着くと、ヒステリックな排外熱は一時沈静化に向かう。それが再び噴出するのは、昭和八年（一九三三）二月から四月にかけての国際連盟脱退をめぐる時期であった。<sup>(2)</sup> この約一年間、特に昭和七年三月から同年九月の満州国承認までの約半年間に唱えられたのが、アジアの融和と平和であった。その延長線上に満州国承認促進運動があり、そこで子供が大きな役割を果たすのである。

すなわち同年六月に満州国資政局から少女使節、同国協和会から女性使節が派遣され、子供・少女、乙女（若い未婚女性）<sup>(3)</sup> が、満州国承認への気運を盛り上げる対外宣伝の柱として活用される。<sup>(4)</sup> さらに九月、少女使節への答礼をかねた日本学童使節が派遣され、国民的レベルで注目を集めるのだ。

ただし少女使節や協和会使節は、満州国から日本へ派遣された公に近い使節であった。これに対して、日本学童使節は、大阪毎日・東京日日新聞社と共同で主催した、民間の教員団体である全国連合小学校教員会（以下…全教連）の主導する非公式な親善使節にすぎなかった。しかし

学童使節は一人歩きをはじめ、日満両政府や関東軍の積極的な協力を引き出し、さらにそれを大衆が支持するという、相乗効果をうみだすのであった。<sup>(5)</sup>

前稿では、全教連と新聞社による学童使節派遣までの経緯、特に新聞社が主催事業として少女使節の答礼計画を企てたところ、全教連からも同種の計画があり、それに新聞社側が便乗するまでの事情及び全教連の実態と役割、そして学童使節が満州国への友好や建国を祝福する使命を担った使節として国民的に認められる過程、全教連が使節を派遣した目的を明らかにした。それにより汚れなき子供というイメージは、平和、友好という美名に結び付けられ、子供による日満親善交流が、満州への侵略を正当化する世論を盛り上げる手段として、官民を問わず国民的レベルで利用されことを指摘した。<sup>(6)</sup>

しかしその際マスメディアや政府が学童使節をどのように利用し、それが大衆の支持を得るのにつながったのか、という問題については十分に論及できなかった。この問題に答えることが本稿の目的である。

新聞をはじめとするマスメディアが開催の主体となり、報道・販売・広告活動の拡大を目的とする手段や戦略として、計画的に実行するメディア・イベントは、大正期から本格化するとされる。<sup>(7)</sup> 新聞社が共同主催する学童使節は、まさに子供を中心としたメディア・イベントの一例であろう。

当時の満蒙ブームを背景とした新聞社等のマスメディアの報道のなかで、学童使節が、①満州事変や満州国建国に関連づけられたイベントへと変化する経緯、また②子供たちは満州国、及び関東州・朝鮮でどのような行程をたどり、③その何が日満両政府と関東軍の積極的な協力を引き出す要因となったのか、をとおして先の問題を明らかにする。それらをふまえて④その後の日本国内に及ぼした影響等を考察したい。

## ① 学童使節のイベント化―メディアによる演出

### (一) 満州国ブームと学童使節

#### 結団式の様子

昭和七年九月一六日までに全国から選抜された使節の小学生たちは、郷土で盛大な見送りをうけ父母や校長等の付添のもと、それぞれ東京に集合し、指定された帝国教育会館一橋寮に宿泊する。翌日一七日午前一〇時から同館で結団式を行うが、第一目の印象を、北海道代表の山口豊(一三)<sup>(9)</sup>は次のように記している。

九月十四日上京してから、まちにまつた日本学童使節の結団式が行はれた。小雨降る中を兄にとともにはれて会場へ向つた。…式場へ着いたのは九時半過であつた。各地代表の人達は式場の前の方に一列に並んで 皆はちきれさうな顔をして元氣一杯な目を輝かせてゐた。後の方には付添つて来られた父兄の方や 先生方がたくさん並んで居られた。両側には付添の先生方や新聞社の方々が居られた。<sup>(10)</sup>

式では、富士小学校校長で学童使節派遣計画の実質的な主宰者ともいえる全教連の上沼久之丞(一八八一―一九六二)が「日満両国の親善は次の時代を作る皆さん方少年少女が互に仲よく手を取り合つて行くことが大切である」と述べ、「本年六月以来の御計画になつたお仕事を説明になつた。」その後、使節一人一人の自己紹介、旅行中の注意などを受けた後、別室で三越婦人子供部製作の制服に着替えた。

これはあらかじめ各自の寸法を調査し、仕立てたもので、「男児服は

紺サーヂ 折襟付カラー付 ダブルボタンバンド付の上衣と半ズボン」  
「女児服は白ブラウス 紺サーヂジャンパーバンド付」、胸には日満の国旗が付き、女子には帽子も支給された(「二頁」)。式の時には緊張して固くなつていた使節達は、子供らしく打ち解けるのも早かつた。この頃になると「君どうだい」「あ、よく似合ふよ」「胸の国旗はい、ね」など言葉を交わし始め、新しい制服を着て控室の椅子に腰かけ、「お互いに故郷の面白いことなどを話し合つた」。

午後一時頃からの帝国教育会館での日満教育提携同盟、全教連共同主催の午餐会では、「えらい方々や父兄の方と一緒に食事をした。父兄の方とはあまり話もせずに」「隣の人達と話をしながら食べ、ずっと前からの友達の様な気がした」。その後会場の隣の一橋小学校で子供達が満州国歌の練習などをする間、引率監督者と使節の父兄は旅行打合せをおこない一日が終わつた(「四一頁」)。

#### 使節の記念品―文部・拓務大臣メツセージと建国人形、絵葉書

学童使節の出発に先立ち全教連の上沼久之丞の名前で、使節の立ち寄り先の満州国の諸官庁をはじめ、国内・関東州・朝鮮の各都市の首長・満鉄本社・関東軍司令部・新聞社の支局に、協力を依頼する書面をおくっている。

それは使節派遣の趣旨説明とともに、「一 学童使節名簿 監督 付添者 二 旅行日程 三 使節携行品目録」を添えた書簡であり、その携行品目録の内容は、次の通りである(「二七―八頁」)。

- 1 文部大臣メツセージ(満州国)
- 2 拓務大臣メツセージ(関東州 朝鮮)
- 3 執政夫妻へ記念品 鳳凰人形 貳
- 4 鄭国務総理へ記念品 春駒人形 壹

5 武藤特命全権へ記念品 春駒人形 壹

6 満州国 関東州 朝鮮児童へ絵葉書数万枚

絵葉書は学童使節出身地の小学生を中心に通信文を記した、その地域を紹介する内容で、全国から一五万枚ほど集められた。<sup>(11)</sup>

また永井柳太郎（一八八一～一九四四）拓務大臣のメッセージは、日本国内の関東州と朝鮮の子供たちに宛てたもので、関東州の学童諸子に拓務大臣の希望を伝える内容であった（朝鮮は後述）。それは「満洲国と日本とが手を握り合つて援け合」うことの必要性を述べ、「満洲事変はどうして起つたか 日本と満洲とはどの様な関係にあるのか良く理解」すること。そして暴政を廃して「各民族が互いに協和」して楽土を築きあげようとする満洲国は、この地に住む人々の幸福ばかりか、「東洋平和の為にもこの上なき歓びである」（三三～四頁）、と記されている。そして鳩山一郎（一八八三～一九五九）文部大臣の「満洲国の少年少女へ」というメッセージは、先日来日した少女使節のお礼からはじまる。

…少女のみならず少年の間にも是非御礼を兼ねて親しく貴国を御訪ねしたいとの熱望が漸次高まり茲に全国八百萬の学童の内から十五人の学童使節が選ばれて貴国に向ひ出發することとなつた次第であります。此の学童使節は固より我が国の少年少女全部の心持を代表するものでありまして純真な心の底から貴満洲国の建設を慶賀し其の前途を祝福し且多くの新しき友人との交を結ばんことを期するのであります。而して此事は将来永遠に相頼り相助けて東洋平和の爲更に進んでは世界人類の平和の爲に大に尽力せんとする日満両国民の手と手とを握り合はせ心と心とを結び付ける根源をなすものと信じます…（三四頁）

そして文相・拓相のメッセージは、行く先々の歓迎会の席で、使節が子供たちに向かって読み上げた。さらに学童使節には、『大阪毎日新聞』（以下『大毎』）、『東京日日新聞』（以下『東日』）社長本山彦一（一八五三～一九三三）のメッセージも託されている。鳩山文相が他国（満洲国）、永井拓相が外地（関東州・朝鮮）の子供へのメッセージであったのに比べ、本山のものは共同主催者を代表した執政溥儀宛てであった。『東日』（九月二〇日朝7）は、鳩山文相とともに本山社長のメッセージを紹介している。<sup>(12)</sup>

…（満日の交流を深め人類平和とともに築くために）先に満洲国より少女使節を迎へ今これに答ふるためわが児童使節を送るに至りました、われ等は東洋治安の第一歩を満日親善にありと信じ童心相交る処に平和の天使純情の地使の尊き姿を想い浮べます…

記念品の人形は子供らしい可愛い贈物で、製作者は上沼の前任の小学校時代の教え子であった老舗の人形問屋の主人山田徳兵衛（一八九六～一九八三）、考案は笹川臨風（一八七〇～一九四九）<sup>(13)</sup>である。建国人形は「何れも新春を寿ぐ子供の遊びで 日本精神の表はれたもので 建国を祝する意味をつけて建国人形と命名した」（一八頁）。執政夫妻は裸の男児が龍の風をもち、女児が羽子板をもった一対、鄭孝胥（一八五九～一九三八）国務総理は裸の男児が春駒にまたがった姿、関東軍司令官武藤信義（一八六八～一九三三）には春駒を持った姿で、解釈の仕方によっては満洲国の建国に乗るものと支えるものという、何か暗示的な内容でもあった。

そして使節は武藤に贈る同型の人形を、満洲国へ出發する前に本庄繁（一八七六～一九四五）にも献上するのである。

## 関東軍司令官本庄の凱旋

決団式の翌日一八日は、満州事変一周年であった。午前八時に宿舎を立つた学童使節たちは、まず本庄繁邸を訪問する。周知のように、本庄は満州事変当時の関東軍司令官であり、八月八日付で関東軍から転出し、九月八日に帰京したばかり。その後任の武藤は、満州派遣特命全権と関東庁長官を兼任して、関東軍の満州国への支配権がますます大きくなる。『大毎』九月八日夕刊一面は、「リットン報告書審議近し／承認を否認すれば我代表は断然引揚ぐ」の大見出しのもと、「連盟があくまで満洲の完全な独立を否認し、日本政府の満洲国承認を取り消さしめようとするが如き決議をなすにおいては前内閣以来の方針により日本代表部のジュネーヴ引揚げを執行するまで」という外務省の見解を報じている。

そしてその記事の下に「満洲に於いて……一大活劇を演じたる中心人物」「本庄前関東軍司令官を迎ふ」という、徳富蘇峰（一八六三―一九五七）の一文が掲載される。帰京の途にある本庄は、先々で「老幼、男女を問わず」社会のあらゆる歓迎を受けているが、これは演出されたものではなく、本庄に「満洲に於ける我が軍隊、我が将士」への感謝が籠っている、なぜなら「本庄將軍は將軍一人ではない、彼は実に満洲軍の代表者」だからだ、と蘇峰はいふ（『大毎』九月八日夕刊）。

九月二日大連を出帆し、四日朝門司港に到着した本庄は、市長や陸軍関係者など多数の出迎えを受ける。その日は日曜日、天気は雨であった。午後一時再び神戸に向けて船に乗ると、下関と門司の中小生が雨の中両岸に整列して、「声を限りに万歳を叫び熱烈なる小国民の感謝を示す」これに対して本庄は「終始義父のやうな眼ざしでこれに応えた」。そして大阪・東京の朝日新聞記者に「今日計らずも内地最初の港でかゝる熱烈なる歓迎を受けることは誠に意外とするところ」と述べている<sup>(14)</sup>。本庄自身もその歓迎ぶりに驚いたのかもしれない。

彼の日記には「雨中ニモ拘ラズ音戸瀬戸ノ両側ニ下関、門司ノ学生及

官民、日章旗ヲ振り歓送シ呉ル。感激ノ至リナリ。」と記している<sup>(15)</sup>。多数の大人も駆けつけたはずだが、『大阪朝日新聞』（以下…『大朝』）、『東京朝日新聞』（以下…『東朝』）はことさら雨中の小国民の見送りを際立たせた記事にしていることも興味深い。

昭和七年九月、満洲国の承認を直前に控え、メディアのセンセーショナルな報道などによる世論の熱狂的な支持のなかで、本庄の名前は満洲国建設を促進した功労者として広く知られていた。まさに本庄は、時の人であった。

## 本庄の帰京と学童使節の決定

九月八日午前九時四十分、本庄をはじめ前満洲独立守備隊司令官森連中将、前騎兵第一旅団長吉岡豊輔中将、前歩兵第八旅団村井清規少将、前関東憲兵隊長二宮健市少将の五將軍の他、関東軍参謀の石原莞爾、和知鷹二、片倉衷等が凱旋列車で東京駅に到着する。新聞は「我が戦史に不滅の武勲／満洲凱旋の五將軍入京す」として、大々的に報じているが、主役はもちろん満州事変を画策した石原ではなく本庄だ。

東京駅には荒木貞夫（一八七七―一九六六）陸軍大臣をはじめ、外相・宮相・海相・法相・農相・拓相ら政府要人をはじめとする数万の大群衆の出迎えをうける。二重橋にかけて人が埋め尽くし、万歳万歳の歓呼のなか、宮内省差し回しの馬車五台に分乗して、二重橋正門から宮中に参内し、陸軍様式通常正装の大元帥である天皇から勅語を賜る。そして本庄はメッセージを発表して、「国民統後の支持に深謝」したという。『大毎』九月九日夕刊

荒木陸軍大臣へ状況報告をした後、本庄が帰宅する途中にも歓迎は続き、「中野町民ノ大歓迎及夜分提灯行列其数二万」であった<sup>(16)</sup>。自宅前には小、中、女学生、青年団、在郷軍人らが押しかけ、満州行進曲を奏でながら飛行機、飛行船、タンクの万燈に「祝凱旋」と大書して、本庄邸

におしにかけて万歳を連呼したという〔『大毎』九月九日朝11〕。

『大毎』九月九日朝刊一面の左上段には、大きく「家族に囲まれた本庄將軍」の一族の写真を掲載するが、それに呼応するかのようには、その中段中央部の大きな囲み記事は、「満洲国派遣学童使節 人選愈々決定 十九日に晴れの鹿島立ち」であった。そこには学童使節、引率幹部の所属と氏名、日程が掲載されている。満洲国ブームに関連する事業の一つとして、学童使節決定のニュースを活用しているのだ。

## （二）満蒙ブームと子供

### 満洲国要人への憧れ―謝介石と学童使節の交流

さらに間近に迫った満洲国を承認する日満議定書調印を盛りあげる関連ニュースとしても、使節の子供達は利用されている。それは調印の窓口を務める外務大臣にあたる満洲国外交総長謝介石（一八七八―一九五四）と大阪から選ばれた学童使節との交流的一幕であった。

『大毎』（九月九日朝1）は、大々的に本庄の凱旋を伝える一方で、同日の七面上半分は、使節全員を顔写真付で紹介する学童使節の特集を組む。ここでは執政に贈る「建国人形」の写真と大阪代表の三好忠幸（二三）の話が記事の中心になっている。

なかでも大の満洲国最員の三好少年が、同国の成立直後、謝介石に真情あふれた祝福の手紙を送ったので、これに感動した謝が丁重な礼状を返した。そこで三好少年は学童使節の一員として渡満し、直接謝介石に会えることが嬉しくてたまらず再び手紙を書いた。それを「喜びを書き連ね／懐しい謝介石氏へ送る／大阪からの…三好忠幸君」という見出しのもと、「したはしいお国 大好きな閣下よ！」として手紙の全文を紙面で紹介している。

僕の大好きな謝介石閣下、御変りは御座いませんか、毎日御国の

ために随分お忙しい御事と存じます、僕は毎日満洲国が日一日と繁栄して行きますことを見て嬉しくなりません、日本も昼はまだなか／＼暑くてやけつくやうですが朝夕はめつくり涼しくなりまして可愛らしい虫の鳴き声も聞え初めました

謝介石閣下、僕は今大変嬉しくてたまらないことが起つてゐます、それは今度僕がいよ／＼懐しい閣下の御国満洲国へ行くことになりましたことです、この間満洲国から日本へ元気に満ちた少女使節の皆様がお越し下さいましたでせう、その答礼使として日本国から日本少女十五人のお友達が海を越えて参ることになりました、僕の大阪市からは二百五十余校の代表として僕が選ばれました、閣下がこのことをお聞き下さいましたならば僕のためにおよろこび下さることと存じます

多分九月二十一日ごろに神戸港を出帆することになります、大すきな閣下、したはしい満洲国御国のおやさしい御友達に御面会出来るのですから僕の嬉しい心持を御想像下さい、そして僕がどれほど喜んでゐるかといふことを御国のお友達に御伝へ下さいませ

謝介石は台湾出身で、日本語の通訳などを経て、日本に留学し、東洋協会専門学校（現…拓殖大学）で台湾語教師をした経験などもある。彼は日本国籍を捨てて中華民国、さらに満洲国の国籍を取得し、後に駐日初代満洲国全権大使なども歴任する。満洲国正式承認後は、外交総長として日本へ公式使節として派遣される立場にあることは、関係者の間には知られていた。<sup>(17)</sup> 大人と子供、官民と立場こそ異なるが、日満親善を担う役割を背負った謝と学童使節は、ある意味では相關関係にあった。さらに謝は、日本に併合された台湾出身の満洲国高官として、五族協和をスローガンとする満洲国と日本をむすぶ、表面上の懸け橋というイメージを被せやすい存在でもあったのである。

日満議定書の調印当日、モーニングにシルクハット姿の謝介石がヤマトホテルまで武藤全権に挨拶にくる。そして武藤は、執政府に向い、執政の謁見式の後、小磯国昭（一八八〇～一九五〇）参謀長とともに満州国側の鄭国務総理・謝外交総長、駒井徳三（一八八五～一九六二）国務院総務長官等と調印式に臨んだ。これを伝える『大毎』（九月十六日夕刊）は、「善隣・満洲国を承認す」「日満両国永遠の誓ひ／調印式目出度く終る」という見出しの左中央部に、謝外交総長と武藤全権の日満代表の声明書を大きく掲載している。満州国承認にあたり、形式上の外交責任者である謝介石と彼を慕う学童使節に選ばれた小学生との交流は、時機を得た話題であった。

そして『大毎』より一日はやく使節の特集を組んだ『東日』（九月八日朝刊）は、東京代表の高野道雄（二三）の喜びの声、すなわち第一に執政、次に自分の所属する理科少年団の団長でもある林博太郎（一八七四～一九六八）満鉄総裁に会える楽しみを伝えている。このように『大毎』『東日』は、ともに満州国要人や同国の建国に関係の深い日本人へ憧れる子供達というイメージをつくり上げていくのであった。

#### 満州国のお父様・本庄邸の訪問

『本庄繁日記』には、九月一日「午前七（八？）時半満州国へ派遣ノ児童十五名来訪、人形ヲ送り挨拶<sup>(18)</sup>」とある。満州事変一周年当日の本庄はまさに分刻みのスケジュールで、一〇時同事変の慰霊祭で靖国神社、一一時武藤大将の留守宅等の訪問、午後は在郷軍人満州事変一周年講演会、その後東京府、市、商工会議所主宰の「本庄中将日比谷公会堂歓迎ノタ」に出席し、この様子はラジオで全国に中継される（後述）。大切な記念日の朝に学童使節は、本庄邸を訪問したのだ。その時の様子と印象を、北海道代表の山口豊は、次のように記している。

九月十八日午前八時宿を出発し 自動車に約三十分許り乗つて本庄將軍を中野のお邸に訪問した。着いて見ると閣下のお邸は 実に質素なものだ こゝに満洲にあつて張學良及全支那軍の肝を寒からしめた関東軍司令官たりし我が本庄將軍がおすまになるのかと僕は実に感動した。用意をとゝのへ 応接室にて約十分ほどお待ち申して居ると やがて閣下と閣下の奥様がお見えになった。僕等は一せいに閣下及び奥様に敬礼した。代表がご挨拶を申し上げ 持参した建国人形をお贈り申し上げた所 たいへんおよろこびになり 明るい笑みを顔に現はしていらつしやつた（四一頁）。

歓迎会や要人との面会では、学童使節は各自持ち回りで担当を決めて、男女各一名が挨拶することになっていた。この日の男児の担当は、大阪代表の三好忠幸であった。『大毎』『東日』の編集顧問の西村真琴（一八八三～一九五六）に続き、三好が本庄の前に出る。

この思い出多い日に満洲国のお父様として仰がれていらつしやる閣下の御凱旋をお祝ひ申し上げます。私共はこれから満洲国のお友達と仲よしになり東洋平和のため御尽しになった帝国軍人の方に御礼申し上げたいと思ひます。では行つて参ります。

そして「私共は去る六月満洲国から来て下さつた少女使節のお礼に参ります」と横濱代表小笠原秀子（二三）の挨拶後、関東代表関根浪子（二五）から本庄は武藤信義全権大使に贈るものと同じ建国人形<sup>(19)</sup>を微笑して受け取る。そして約二〇分にわたり使節たちに日露戦争から説きはじめ、満州の状態や今後の国民の覚悟を語る。そして「どうか満洲国に行かれたなら、六月に來られた少女使節達にも私がどんなに感激してゐるかを伝えて下さい元気で身体を大切に行つてらつしやい」と激励している（『東

日』九月一九日朝11」。

大阪府知事の縣忍（一八八一～一九四二）は、これらの一連の『大毎』『東日』の記事を読んでいたのだろう。「日滿を結ぶ 天使としての我学童使節」と題して、次のように記している。

学童使節の横浜代表の少女が満州国「少女使節のお礼に参ります」といったが、「さうだ！そのお礼の大切な仕事はきつと、けがれざる、魂の持主達の無邪気な行動によつて十分はたされるであらう」。本庄將軍が満州国で少女使節の来日に、私がどんなに感激しているかを伝えるよう、学童使節に伝言したことは、「日本国と満洲国の固い握手が東洋の平和を形づくる基礎となる旨を…全国の学童を代表する一行」に「心かなる希望を抱」いたからではない。学童使節は満鉄總裁や執政などに對しても大人では考えられないほどの親密な尊敬の気持ちを抱いているようだが、『それでよろしい』と私は思ふ。その気持で、この十二名の天使に似たる地上の使者は…民族平和のシンボル輝かしい五色旗が平和に秋風に揺ぐ満洲国を訪ふのであらう」〔大毎』九月三〇日朝12〕

満州事変一周年の記念日に「満洲国のお父様」である本庄へ出発の挨拶をして建国人形を贈呈することは、『大毎』『東日』の話題作りにも、自らの存在をアピールしたい全教連にも、共に効果的な演出であつた。

### 満蒙ブームの背景―鬱憤と優越感

本庄邸を訪問した後、使節一行は、午前九時半からのラジオ「朝の子供の時間」出演のために愛宕山の放送局にむかう。

満州事変の発端になった柳条湖事件は、関東軍参謀の板垣征四郎（一八八五～一九四八）、石原莞爾（一八八九～一九四九）らによって周到に計画された日本軍の自作自演であつたことは、今日ではよく知られている。昭和六年九月一八日夜、奉天近郊の南満州鉄道の線路を独立守備隊（南満州鉄道を守備する歩兵隊）歩兵第二天隊付の河本末守中尉

が爆破したという報告をうけ、その近くに待機していた河本の上司である川島正大尉が、北大營の中国軍を攻撃する。そして爆破は中国側の計画的行動とする関東軍の虚偽の発表を鵜呑みにした報道を新聞は繰り返し、満州事変を熱狂的に支持する世論づくりに重要な役割を担うのである。<sup>(20)</sup>

現地から送られてくる写真をのせた新聞の号外やニュース映画の上映など、日本を正義、中国・国際連盟を悪者とする一方的なニュースがセンセーショナルに撒き散らされ、満州各地をつぎつぎと占領する日本軍の様子に、国民の興奮は高まり、<sup>21</sup>「生命線」や「非常時」が流行語となり、嵐のような満蒙ブームがおこる。

民衆は単純に新聞報道を真にうけて、中国への敵意をもち、戦争を支持した。しかも生活に恵まれない人の方がむしろ好戦的であり、排外的であつた。

またこれらの声は、民衆の排外熱・戦争熱が、日ごろの中国にたいする蔑視感や、日清・日露戦争の犠牲によって獲得したと信ずる権益への執着心と結びついていたこと、むしろこれらの蔑視感や執着心が事件をきっかけに、マスコミのセンセーショナルな報道ぶりによって噴出させられたものであること、そして日常生活のうっぶんのけ口ともなったことを物語っている。<sup>(21)</sup>

昭和五年（一九三〇）の昭和恐慌がかつてない深刻な不況をひきおこし、失業者は百万をこえ、栄養不良の学童が目立ち、欠食児童の存在が問題になったのもこの頃だ。昭和六年は満州事変の軍需景気回復と円安による輸出の増大により、都会では景気が回復しはじめたが、東北、北海道は大凶作で、農村はますます窮乏し、特に東北地方では多くの人々が飢餓線上をさまよい、娘の身売りなども続出したという。

『大毎』（九月三日朝7）は、「欠食児救へ！／悲惨、涙なしに見られぬ／児童教育の重大問題／可憐、空腹を秘めて登校」という見出しのもとに、「不景気の深刻化とともにますます／増えて来た欠食児童―大阪市だけでも最近の調査によれば一千七百八十三名からの児童がすき腹で学校に通っている事態を伝えている。その大部分は最近失業したり、操短（操業時間の短縮）に出くわした家庭の子で、調査にいつても見栄があり、親はなかなか本当のことを言わない。しかし子供は正直で、腹が減っているので体操の時間を休ませてくれという。生田大阪市教育部長の談話では、これは教育問題ではなく社会問題だが、小学校でこのような児童がいる以上ほっておくわけにはいかないと語っている。

このような不満と一等国の優越感から生まれる中国への蔑視が複雑に融合し、日本国内では満州事変をきっかけに、いわゆる満蒙ブームがおこるのであろう。

### （三）満州国建国のメディア・イベント

#### 満州事変一周年の特別放送

満州事変一周年の一九日（一九三一年）は、「放送局でもこの一日を挙げて満州事変記念放送番組の豪華版を編成し、現場中継を大活躍させ日満両国の大空に感激電波を乱舞させる」として、多くの記念放送があった。その日は日曜日、『大毎』（九月一日朝12）のラジオ面は、「飛躍する感激と歓喜の電波―電波！」「満州事変一周年回顧の記念放送」の見出し下に、三つの柱となる番組の詳細が並んで紹介されている。

「昼は／満洲の戦跡にマイクを備へ／勇将追懐談中継」「夜は／本庄中将の歓迎会実況と／満洲から武藤大将の講演と／記念打鐘を中継」、そして最後が囲み記事で「本社、東日主催訪満学童使節の送別放送」であった。当日の番組表の主な内容は、以下の通りである。

午前の部	
八・五〇	ラヂオ体操
九・〇〇	気象通報
九・一〇	栄養料理
九・三〇	本社主催訪満学童使節を送る
一〇・〇〇	宗教講和
一〇・四〇	講演「北満の大洪水に就いて」
一一・一〇	講演「益々緊密度を増す気象と人生の関係」
一一・四〇	時報、天気予報

午後の部	
〇・三〇	ニュース、告知
〇・五〇	満洲事変記念放送（満洲より放送）
二・〇〇	オリンピック選手歓迎
四・〇〇	ニュース、告知
五・三〇	日曜コードモ知識
六・〇〇	童話劇「童心」
六・三〇	時事解説
七・〇〇	ニュース、告知、
	本庄中将歓迎の夕（日比谷公会堂より中継）
九・三一	（満洲より）満洲国独立記念放送
一〇・四〇	講演「独立守備歩兵第二大隊長として北大宮の攻撃回顧談」

太字が満州事変の関連放送だが、〇時五〇分からの満州事変記念放送は、満洲の柳條溝（湖）<sup>②</sup>、北大宮、南陵、奉天のそれぞれの場所からの中継で、謀略の実行者である河本末守中尉が爆破の現場から「柳條溝爆

破に就いて、そして「皇軍が正義の銃火を初めて放った激戦地」から川島正大尉「北大宮攻撃談」などの「武勲に輝く満洲事変の勇将」の六名の講演が続く、最後は関東軍司令部がある奉天のスタジオから板垣征四郎少将の「満洲国建国に就いて」の話だ。

夜七時半からの『満洲の父』我らの『本庄中将の歓迎の夕』は、日比谷公会堂からの生中継、東京市長の挨拶、府知事、天皇陛下万歳、帝国陸軍万歳にはじまり、本庄の挨拶の後、戦歴を紹介する軍人による三つの講演がある。その後の満洲国独立記念放送は、武藤信義の講演「満洲事変に就いての所感」、奉天市長、憲兵隊長講演、その日の最後は川島・河本の所属する当時の独立守備隊第二大隊長島本正一の「北大宮攻撃の回顧談」で終わる。満洲事変と満洲国建国一色の内容であった。

そしてその日の午前九時半と午後六時の「子供の時間」の枠の一つである「朝の子供の時間」に、学童使節の送別放送が満洲事変関連の子供向けの放送として組み込まれているのである。その内容は

- 一、奏楽
- 二、お話「訪満学童使節」 本社学芸部顧問理学博士西村真琴
- 三、付添職員及使節紹介
- 四、使節代表の挨拶
- 五、奏楽（イ）「満洲国歌」（ロ）君が代

であった。そして「皆さんも全国小学生の代表として選ばれた十五人の訪満学童使節をラジオで送別することにしませう」と結ばれている。

#### ラジオ・新聞と学童使節

昭和七年二月一六日、全国のラジオの聴取契約数は百万を突破していた。臨場感にすぐれるラジオ放送の魅力は、日本全国に広がり大きな影

響力をもっていた。この段階でラジオは『東日』『大朝』などの大新聞や雑誌『キング』などの発行部数に肩を並べようとしていた。<sup>(23)</sup>さらに昭和一〇年（一九三五）二百萬、一五年（一九四〇）には六百万に迫り、ラジオは政府の意向を伝える国家的な統制装置となり、国民意識の統一や戦意高揚などに利用されることはよく知られている。ただしまだこの時点では、ラジオは新聞に情報を管理されていたのである。

日本におけるラジオ放送は大正一四年（一九二五）にはじまるが、当初大新聞がラジオの放送事業に関心を示し、参入を企てたことはよく知られている。しかし、大正一五年（一九二六）、放送の全国組織化を目的として、政府が非営利の社団法人日本放送協会を設立したことで、新聞社はラジオを競争相手として意識する。そして昭和三年（一九二八）には、東京以下七つの基幹局によって全国中継の放送網が整備され、聴取契約数も飛躍的に伸びると、その速報を「強力な武器」と見なすようになる。

例えば、日本で初めての臨時ニュースは、九月一九日の満洲事変勃発の知らせであり、九月中にはその関係の臨時ニュースが一七回も放送される。速報という点ではラジオにかなわない新聞社・通信社側は、一〇月末に臨時ニュース放送の中止を申し入れている。そして昭和八年二月、一日四回、合計六五分の放送協会編集ニュースの時間を一五分に短縮することで話し合いがつくが、実際には時間短縮は実現せず、臨時ニュース問題もそのままになった。<sup>(24)</sup>

『大毎』『東日』と『大朝』『東朝』の、いわゆる大新聞にとって、いちはやく満洲の戦況を伝える号外の発行は、国民の大きな関心であり部数拡張競争を左右していた。従って新聞社側にとってラジオニュースを何らかの方法で制限する必要があった。

そこで新聞社・通信社側は、運営の実権こそ通信省に譲る一方で、同法人に多くの理事・監事をおくる最大の圧力団体となり、「放送局には

独自の取材記者をもたせず、新聞・通信社が配信する原稿だけをニュース・ソース」とさせた。つまり新聞社が「独占的なニュース提供者」になることで、情報の「速報というラジオメディアの優位性」を制限したのだ。<sup>(25)</sup>

しかし情報がある程度コントロールできたとはいえ、聴取契約数百万を突破したラジオの影響力は、大新聞にまさるとも劣らないものであった。満州事変勃発後は「放送量著しく増加し」、東京中央放送局の一日のニュース放送時間の平均は、昭和三年（一九二八）の二三分から昭和六年には一時間四分へと増加する。それは大阪中央放送局も同様であった。放送開始以来「一日二〇分乃至二八分であったが、五年に至り四分となり、更に六年には一時間以上に激増した」。<sup>(26)</sup>

そして満州事変をきっかけに現役軍人による講演放送が活発化し、一月には奉天放送局からの中継もはじまり、満蒙事情特別講座も新設される。元旦には「日満交換放送」がおこなわれ、奉天の本庄と東京の荒木の年頭の辞が電波にのるなど、ラジオは新聞とともに、連日満州事変にはじまる日本軍の行動を賛美していたのである。

このようにラジオもいわゆる「国策報道」に努め、満蒙ブームを煽っていたが、満州事変一周年のこの日の記念放送は、九月一六日の「満洲国承認の夕」とともに、大きな節目となる放送であった。そこにラジオは学童使節関連の話題を、記念放送の主要番組の一つにしている。さらに前述のように、新聞は本庄繁への出発の挨拶を取り上げるなど、メディアは子供関連の話題づくりの中心に同使節を活用しているのである。

## メディアと子供の大衆化

学童使節送別会を放送した「子供の時間」は、「大正一四年七月二二日の旧東京放送局本放送開始と同時に始った番組」で、昭和三年一月

にご大札記念として全国放送になり、「東京、大阪、名古屋などの持ち回り番組として、童話、児童劇、子どものためのラジオドラマ、音楽（洋楽、邦楽、童謡、唱歌など）、講話を主な内容として放送した」。さらに関谷五十二（一九〇二～一九八四）、村岡花子（一九九三～一九六八）をアナウンサーに起用して、子供に聞かせたい内容をわかりやすく伝える「コドモの新聞」が放送されたのが、昭和七年六月一日からであった。<sup>(28)</sup>

「コドモの新聞」の放送開始にあたり、昭和七年三月一九日の「子供ニュース」新設許可申請書」には、放送局の聴取嗜好調査によれば子供にニュースを聞くことを望むものが多いとして、次のように記されている。

現在のニュースは子供にとって非常に難解なもの多く、各新聞に於ても特に子供のために子供欄を設け或は子供付録を付して子供に適するニュースを編集しおれる状態より見ても子供に理解せしむるニュースの創設は必要事なり。<sup>(29)</sup>

ラジオへの出演を終えた使節は、明治神宮、靖国神社に参拝、日本橋三越で昼食後、浅草、上野動物園などを見学してホテルに帰り、明日の出版に備える。『東日』（九月一九日朝刊11面）は、本庄邸からラジオ出演等のこの日の動向を伝える記事の隣に、大きく「喜びに満ちて学童使節を待つ満洲のお友達」、すなわち「童心を通じて結ぶ日満の提携に心からなる歓迎を表し千秋の思」いで待つ満洲国側の準備と、日本を訪問した少女使節の一人である楊雲が歓迎式で歓迎の辞をのべることになった、と満洲国側の様子を伝えている。

すでに学童使節は満洲国少女使節の答礼という日満の子供交流の枠をこえて、日本国内の満洲国承認にわく満蒙ブームをセンサーショナルに盛り上げる、政府や軍を巻き込んだ半官半民のイベントの一つとして、

『大毎』『東日』の新聞社を中心とするマスメディアによって位置づけられていたのだ。

## ② 学童使節の満州国訪問

(一) 大連から新京・奉天―溥儀と武藤全権への謁見

### 出発の日

出発日の一九日は、午前中に斎藤実(一八五八―一九三六)首相に挨拶、式部欽一文部省普通学務局長を訪問後、鳩山一郎文相の手からメッセージの伝達式が行われる。そして内田康哉(一八六五―一九三六)外相、荒木貞夫陸相、永井柳太郎拓相、永田秀次郎(一八七六―一九四三)東京市長を訪問する。荒木陸相は「昭和の御代に生まれた日本人であること、日本人のしなければならないことは何か」をよく考えることと、満州の軍人には「日本軍人たることを忘れてはいけない」、と伝えるように話し、記念撮影を行った(『東日』九月二〇日朝刊)。そして内田外相は、長春・奉天・安東の各総領事及び満鉄東京支社長へ「日本学童使節派遣ニ関スル件」として使節の目的を記し、「貴地着ノ節ハ諸事便宜供与」をはかるよう依頼している<sup>(30)</sup>。

斎藤実との面会が嬉しくてたまらない東北代表松岡達(一二三)は、その感激を次のように綴っている。

：僕は一同を代表して 閣下に御挨拶を申し上げた所…(斎藤から)今度満洲国はお友達の国となつて 子供から仲よくして行かねばならない。丈夫で元気で行つておいでなさいなどと有りがたいお言葉や御注意をいたゞいた 僕は実感激した。これは僕にとつて、一生忘れることの出来ない光栄 名誉である。それに閣下は東北の御

出身 僕も閣下の御郷里に近い仙台である。一生けんめい努力して必ず／＼東北男子の名誉をけがすまいと かたく心にちかつた(四五頁)。

『東日』本社で昼食をとった後、使節は神田の教育会館で東京市小学校一同の送別会に臨む。東京市小学校二〇四校から一校四名、付添一名計五名の出席で、一〇二〇名の参加者があり会場は立錫の余地がなかった。プログラムの歓送の辞は、外務大臣、文部大臣、拓務大臣、東京市長、東京代表児童(男女一名)、主催者代表となっている。閉会後自動車で二重橋前に行き、「宮城を恭々しく遥拝して、天皇皇后両陛下の万歳を三唱し、心の底より最敬礼を捧げた。」東京駅は大群衆で、大混雑をくりぬけホームに入り、投げ込まれるように車内に入った。「どこを見ても人の波、旗の嵐、三時五十五分、嵐のやうな萬歳のどろき、日の丸の美しい大波の中を僕ら一行をのせた列車」は東京駅を出発する(四六七頁)。

一行は横浜で下車し、横浜市長へ挨拶し、ここでも千名を超える横浜市教員会歓送会を経て、午後九時の夜行で出発する。二〇日午前四時に通過した名古屋でも学童使節を送りだした露橋小学校父兄の見送りがあり、午前八時に大阪着。大阪市長や府庁、第四師団司令部、『大毎』本社を訪問し本山社長からの溥儀へのメッセージを預かる。そして中之島中央公会堂で千五百名の児童による歓送会があり、『大朝』本社にも挨拶をする。翌二一日神戸でも多数の小学生の出迎えを受け、湊川神社を参拝し、市長や兵庫県知事を訪問し、乗船。經由地の門司でも市長を訪問し、二四日午前八時大連に到着した。

使節の二三日間(九月一九日―一〇月十一日)に及ぶおおよその旅行日程は、以下の通りである。【表一】

日本側の公式な歓送迎会は出発前四回、帰国後三回の計七回、満州国

表1 学童使節の主な旅行日程〔上沼久之丞編『日本学使節満州国訪問記』所収「旅行日程」(26～31頁)より作成〕

9/16(金)	東京	随時東京に集合
9/17(土)		〔午前〕結団式(帝国教育会館)〔午後〕日満教育提携同盟、全国小学校教員会共同主催歓迎午餐会・満州国家練習・使節父兄等と打合せ
9/18(日)		本庄繁訪問・愛宕山中央放送局・明治神宮・靖国神社・三越本店
9/19(月)	東京～横浜	〔午前〕首相・文相・外相・陸相・拓相・市長等訪問・東京日日・東京朝日新聞社 〔午後〕東京市校長会／校長協議会／東京市教員会合同主催歓迎会・宮城遙拝・東京発・横浜市長・横浜教育会歓迎会
9/20(火)	横浜～大阪	大阪市長・大阪府庁・第四師団・大毎・大阪市教育会歓迎会・朝日新聞社挨拶
9/21(水)	神戸	湊川神社参拝・神戸市長・兵庫県知事・〔正午〕乗船
9/22(木)	門司	門司市長訪問・八幡神社・和布刈神社参拝・〔正午〕乗船
9/23(金)		航海
9/24(土)	大連	埠頭屋内で交歓会・大連神社・忠霊塔参拝・大連市長・民政署長・満鉄副総裁・満州日報社・大毎大連支局・大連新聞社招待昼餐・大連市歓迎会・大連市長及民政署主催晩餐会
9/25(日)	旅順	関東庁訪問【表写真1】・後楽園野外交歓会・旅順市児童交歓昼餐会・戦跡訪問
9/26(月)	大連	鮑代表会見・満鉄招待昼餐会
9/27(火)	大連～新京	
9/28(水)	新京	日本領事館・執政府執政謁見・國務總理・外交部長・新京市政公署市長・新京日満教育連合使節歓迎会
9/29(木)		長春独立守備隊・第四連隊・南嶺戦跡【表写真2】他・文教部総長外交部総長御招待賓宴楼・長春高等女学校日満児童交歓座談会
9/30(金)	奉天	歓迎式・奉天神社・忠霊塔・関東軍司令部武蔵全權大使・満鉄奉天事務所・奉天省公署・奉天市政公所・奉天総領事館・奉天居留民会・奉天警察署・春日小学校日鮮児童歓迎会
10/1(土)		奉天省長奉天市長連合主催歓迎午餐会・満州国児童歓迎会・日満中継ラジオ放送(日鮮満学童の歓迎の辞と使節代表の挨拶)
10/2(日)	奉天～撫順～奉天	憲兵司令部・独立守備隊・奉天発・小学校代表歓迎式・撫順警察署・撫順新報・満鉄炭坑事務所・撫順公署・撫順学童の歓迎会・撫順発・仏教連合婦人会招待晩餐会使節教育庁協和会主催晩餐会
10/3(月)	安東	駅前歓迎式・内鮮満児童交歓会・安東県長招待晩餐会
10/4(火)	安東～平壤	安東守備隊・満鉄地方事務所・安東憲兵隊・安東県公署・安東領事館・東遼商工日報・安東新聞・国境毎日新聞・安東警察署・安東発
10/5(水)	平壤～京城	平壤衛戍病院・平安南道庁・平壤府庁・平壤府小学校交歓会・知事府尹招待園遊会・平壤発
10/6(木)	京城	朝鮮神宮・朝鮮總督府庁・京畿府庁・京城府庁・朝鮮教育会主催内鮮児童交歓会・京城放送局にて放送
10/7(金)		篠田李王職長官・李王家お茶の会・京城三越支店・朝鮮軍司令部・總督官邸總督總監婦人お茶の会
10/8(土)	京城～仁川～京城	京城発・仁川府庁・内鮮児童交歓会・府尹招待昼餐会・仁川港見学(船に仁川公私立初等学校生徒代表及職員同船懇談)・仁川発・京城発
10/9(日)	釜山	釜山駅ホテル階上歓迎会・道庁・釜山府庁・龍頭神社・釜山公立高等普通学校運動会参観・釜山普通学校参観・歓迎会・府尹招待昼餐会と綱引及捕魚・関釜連絡船
10/10(月)	下関～広島	赤間神社・下関市役所・下関発・広島県庁・広島市役所・第五師団・広島偕行社報告会・広島放送局にて放送
10/11(火)	広島～大阪	広島発(AM2:32)・大阪着(AM9:40)・大阪市庁・大阪府庁・第四師団司令部・大阪毎日新聞社・(昼食後)座談会
10/12(水)	大阪～名古屋	大阪発・名古屋駅前にて挨拶・熱田神宮・名古屋市長・市長招待晩餐会・公会堂報告会
10/13(木)	名古屋	大毎支局招待晩餐会
10/14(金)	名古屋～東京	名古屋発(AM1:16)・東京着(AM9:00) 〔午前〕宮城遙拝・明治神宮・靖国神社・東京市長・東京日日新聞社 〔午後〕東京朝日新聞社・陸相・首相・鮑満州国代表・文相・拓相・外相・高等小学校報告会・帝国教育会東京市教員会招待晩餐会・解団式・富士小学校にて記念品分配

ゴシックは歓迎会・イタリックは執政・関東軍司令官謁見



表写真1 関東庁訪問  
〔『学童使節満州国訪問記』より〕



表写真2 南嶺の戦没者慰霊  
〔『学童使節満州国訪問記』より〕

一四回、朝鮮一回に及び、子供達の交流というよりも執政をはじめとする満州国要人や各都市の役所、軍や満鉄などの訪問が主となっている。引率の責任者の上沼も「訪問、交歓会、慰問、慰霊等に目まぐるしく、満洲国の教育事情につき懇談を遂げる機会は、殆ど絶無」であったと帰国後に記している<sup>31)</sup>。

### 大連の歓迎

満州国の表玄関である大連に着くと、「通路の両側は身うごきも出来ない程の歡迎人」であった(六一頁)。<sup>32)</sup>『満州日報』(九月二三日朝2)は、大連奨学会、大毎大連支局、満州日報社主催で、二四日午後一時から満鉄協和会館で開催する「学童使節歡迎送迎会」の告知を右下三段抜の大きな囲み記事で掲載しているのはじめ、連日学童使節の話題を取り上げている。

歡迎送迎会は、千人余の児童が集まり、市長等の挨拶の後に学童使節の北海道代表山口豊が拓務大臣のメッセージ「関東州の学童諸子に告ぐ」を読み上げる。(その全文は囲み記事で紹介されている。)そして大連市の日本人と中国人の学童代表が歡迎の辞を述べた後、金沢市代表の荒川宏が「：各大臣から満洲の友達と仲よくして来いとお仰せに我々は先づ日満のため、東洋の平和のため手をとつて更に大きくは世界平和のために握手しに来ました、我々は子供ですが、この重大な任務をきつと元気に果します。」と「男らしい決意」を示した後、横浜代表の小笠原秀子は次のように挨拶する。

私共は次の二つの使命を果しました：(一つは少女使節のお礼と)又一つは大満洲国のお父様たる本庄將軍の「自分は以前と変らぬ元氣である大連へ行つたら皆さんに呉れぐもよろしくいつてくれ」との御言葉をお伝へに参つたのであります、私共は御国の

為めに尽す関東州の皆様は厚く御礼を申し上げます(『満州日報』九月二五日朝7)

そして船中学童使節たちが練習した、付添の大阪船場小学校訓導田村千世による満州国建国を祝う創作劇「筍の春」を交歓会で披露した。

翌日は旅順へ向かい二〇三高地をはじめとする日露戦跡を訪ね、大連と同様の児童交歓会にのぞむ。二六日は満州国初代公使として日本に赴任するために、大連から出発間際の鮑觀澄(ほう かんちよう)一八九八(一九七五?)に会見し、乗船の為にホテルをでる鮑を玄関の両側に並び拍手で見送る。そして二七日「大連旅順の各方面に至る所で大歡迎を受け」た使節一行は、午前九時の特急(満鉄の好意で特に増結された二等寝台車)で大連から新京に向かうのであった。【写真二】

(沙河口、周水子、全州の各停車場では)三分間停車を利用してホームに列んだ一行にあびせる大歡迎はたまらなくうれしい。可愛い、代表の生徒の歡迎の言葉と一行代表の答辞が交換された。：「僕達の行く所歡迎攻めに会はずる所なし」と誰かが弁論式の口言をはいて笑はした(七四～六頁)

どこでも歡迎の嵐であった。奉天ではわずか七分間の待ち時間にもかかわらず関東



写真1 旅順水師堂  
〔『学童使節満州国訪問記』より〕



写真2 溥儀との記念写真  
【『学童使節満州国訪問記』より】



写真3 鄭孝胥への贈呈  
【『学童使節満州国訪問記』より】



写真4 鄭孝胥との記念写真  
【『学童使節満州国訪問記』より】



写真5 新京での交歓会  
【『学童使節満州国訪問記』より】

軍少佐、満州国秘書室長をはじめ市民数百名が出迎えた（『東日』九月二八日夕二）という。

### 新京の歓迎―溥儀との謁見

午後八時新京に到着、駅を降りると、新京市政公署主催、國務院文教部後援による歓迎会が開かれ、市内の児童代表一〇〇名、附属地児童代表、童子団（満州国側五〇、日本側一〇〇）などから歓迎をうけ、軍隊の先導の提灯行列で、その日はホテルに入る。

翌日は九時領事館訪問、一〇時三〇分執政溥儀に謁見する。足の痛みで自室に籠っていた溥儀は「心から喜んで使節に引見され」「使節一人一人に握手され」た。そして使節代表の挨拶を通訳で聞き「一々うなづき、ほ、笑みを浮かべ足の痛みをおして始終立ちつくし」、その後執政の挨拶と献上品の贈呈がおこなわれた。『大毎』九月二九日朝11

なかには頭を撫でられた幸運の使節もいたという。今度の旅行中の最大の名誉として、東北代表の松岡達（二三）は次のように記している。

記念撮影の折り おそばの者が お椅子におかけになるやうに申し上げたが「いらんいらん」と仰せになった。これは 皆が立つてゐるのに 自分だけ腰かける事は出来ぬもの もつたいない御心からださうである。僕はこの時 さすがは王道政治をおとなへになり一般民衆と共に苦楽をわけさせ給ふ御仁慈深い大御心と しみじみおそれ多く思つた（二七三頁）

一一時三〇分國務總理鄭孝胥に謁見して建國人形等を贈呈したのを始め、謝外交総長に謁見する。謝は新京到着時に使節の寸法をはかり、使節一人一人に立派な満州服を用意し、それを贈るといふ演出をしている。そして午後は新京高等女学校で満州学童七〇〇名、日本学童六〇〇名、関係者七〇名が出席する「学童使節歓迎会」（日満合同教育会主催）だ。そこで使節たちは、日本全国の小学校児童から預かってきた絵はがきや便り等を満州国児童に贈り、子供間の交流をはかっている（『東日』九月三〇日夕二）。【写真二】【写真三】【写真四】【写真五】

奉天―武藤全権の謁見と関東軍

九月三〇日は奉天に移動し、武藤信義全権大使等の満州国建国の功勞者に記念品の人形を贈呈する。

さしにも広いプラットフォームが、日満旗を手にくち打ち振る歡迎の人々の波の渦巻であつた。お迎への関東軍の藤本・堤岡少佐、森島総領事代理、市代表の方々、日満学童等が整列した中で、市政公署音楽隊の奏楽裡に協和会からの花束を頂き、それより駅南口広場に向ひ、正面にまうけられた一段と高い壇に立つて入奉の御挨拶をなし：「日本帝国萬歳」「学童使節萬歳」の熱叫をあげ：（奉天神社に参拝する）（八七頁）

その後使節は関東軍司令部を訪問する。四階建てのいかめしい建物で、門に入る時はかたぐるしい気がしたが、武藤は大変くつろいだ様子で面会してくれたので、予想に反して非常になごやかな雰囲気だった（八七頁）という。使節は武藤とともに小磯参謀長、岡村副参謀長らと面会し、横浜代表小笠原秀子（一二三）が軍首脳に向かい挨拶をした。

『大毎』（二〇月一日朝）は、奉天特電として学童使節の挨拶の全文を掲載している。そこで小笠原嬢は、武藤及び関東軍に対する最大の賛辞を述べている。

武藤閣下：特命全権大使として重大なる使命を果されたる閣下こそこの大陸に高き理想をもつて翻る日の丸の中心にあたつてゐると申し上げませう、つまり最も優れた中心を得て日の丸の旗は丸々とまとまらねばなりません◇そこに閣下に対する限りなき感謝が湧いてゐることをお察しく下さいませ、そしてそのまゝ、そつくり在満全部の軍人の方に捧げさせていたゞきます

武藤ら三將軍らは、その前の「私たちには満洲の土はその一握り中にもわが忠烈なる武士の血の香がこもつてゐるのだと思はれました：」のあたりで目を潤ませて聞き入つていた、という。そして彼は使節たちにむかつて「諸子が全国八百万学童の代表としてわが関東軍將兵を訪問くだされたことは全滿に散在する將兵に残りなく伝へます。」と話し、第二の国民として東洋平和を建設することを解りやすい言葉で述べる。そして使節一行は建国人形を献上し、記念撮影をおこなった後に奉天日本人学校主催の歡迎会に臨むのであつた。『大毎』（二〇月一日朝）

翌一〇月一日午前中は、北大營、旧張學良邸博物館など見學後、午後奉天市長などの主催の午餐会で満州の学童と同席で満州料理を食べ、協和会を訪問する。同会は、前述のように昭和七年（一九三二）に満州国や関東軍の高官を幹部として発足した、満州国の住民を組織し動員するための官制団体であつた。その歡迎会で高脚踊りや手品などを見て民族協和運動の工作ポスターと記念品に青龍刀と紅槍会匪の槍と砲彈を目錄でもらう（九〇―一頁）。

紅槍会は、後述するいわゆる匪賊、つまり反日的な武力行動をする正規軍以外の抗日集団の一つである。辛亥革命後の中国、特に華北の農村地域に組織された民間の武装団体で、主に一九二〇年―一九三〇年代に活躍したという。赤いふさをつけた槍を武器としたところから命名されたが、日本からすると満州の治安を犯す悪者の紅槍会を退治した記念品を日本の子供たちに贈つたのだろう。使節たちは奉天の総領事館でも匪賊からの分捕品などみせてもらつてゐるが、その際贈られた記念品もとに帰国後、宮城や鹿兒島などでは、土産品の展覧会などしている。

そして午後三時から奉天小学校連合会主催の「訪滿大日本帝国学童使節歡迎会」に臨む。歡迎会では六月に來日した少女使節奉天公学校高級一年雷静淑が学生代表として挨拶し、使節のメッセージや挨拶は協和会女性使節の一人で、奉天の日本人小学生に中国語を教える馬士傑が通訳

をしている。午後八時三十分からは、一五分間の日満中継のラジオ放送に出演し、日、鮮、満学童の歓迎の辞及び使節代表の挨拶が日本中に流れた（八六頁）。

さらに一〇月二日は、憲兵司令部を訪問した後、独立守備隊を訪ね、柳条湖事件の当事者の川島大尉にも会う。「川島大尉以下将校達は、ドツとばかりに取まいて『やあ可愛いぞ、諸君！』と頭を撫で使節達も嬉々として腕にすぎるいふ有様、同隊が捕獲した紅槍会の槍を一行に贈られた（『大毎』一〇月三朝日）という。

## （二）行程の不安―治安の悪化

### 新京・奉天付近の緊張

しかし学童使節は満州国民に歓迎されたばかりではなかった。満州事変の不拡大の方針を無視して関東軍は軍事行動を拡大し、一〇月には奉天を退去していた張学良の拠点錦州を爆撃して、昭和七年一月占領するなど、半年ほどで熱河を除く満州の主要地域をほぼ制圧した。そして同年三月、満州国の建国宣言があり、六月に少女使節が来日、そして九月に学童使節が渡満するが、当時王道楽土を創りあげたとされる満州国の治安は奉天付近を中心にかなり悪化していたのである。

例えば、大阪代表の三好忠幸は、大連と奉天のほぼ中間点にある「熊岳城についた時にこゝにある独立守備隊の兵隊さんが僕達の列車に乗つて下さつて保護して下さいたのには感謝せずにおられなかつた」（七四～五頁）と記している。そして『大毎』（一〇月四朝日）は学童使節印象記の「珍しかつたこと」として、「どの汽車にも兵隊さんが乗つてゐる、停車場に鉄条網が張つてあり、馬賊の旧式な鉄砲をもつお巡さん」がいたことをあげ、車内が物騒な状態だったことを伝えている。

学童使節が訪れたほぼ同じ時期の満州国の事情を記した篠原義政『満州縦横記』は、当時の様子をよく伝えている。篠原は群馬県出身、東京

帝国大学卒業、内務属、内閣軍需局事務官、国勢院書記官を得て昭和七年一月衆議院に当選した人物で、「昭和六年乃至九年事変（満州事変）ニ於ケル功ニ依リ勲四等瑞宝章」を受けている。<sup>(32)</sup> 同書は「昭和七年十月一日東京駅出発、同月二十一日神戸帰着まで二十一日間の満州視察旅行記<sup>(33)</sup>」である。つまり学童使節と前後して篠原は朝鮮を経由して満州に入り、満州国の軍人をはじめ民間の主要人物に直接面会し、その話を採録しているのだ。

篠原も三好少年と同じく、朝鮮を出て、「十時二十分連山関を過ぎ」奉天に近づくと車内は緊張につつまれたと、記している。

車掌が来て「今この先の旧下馬塘に匪賊が現れ、村民が避難中です、それで此の列車に先行して今装甲列車が進発し、後から討伐隊が参るとのことです、若し銃声がしましたら頭を伏せて下さい」、そろ／＼満州の臭ひがして来た、車窓から避難民の姿が見える、子を抱へ馬を曳き荷物を負ひ陸続と逃げて来る……<sup>(34)</sup>

かつて奉天付近に匪賊襲来の報道があり、全教連地方支部の金沢・仙台・高知などから子供たちの安全を心配して、訪満を予定通りに決行するか、という問い合わせがあったことを紹介した。<sup>(35)</sup> そこで上沼が陸軍省へ相談したところ、担当者一笑に付され、特に満鉄付属地なら全く問題はないという答えだった。しかしそれは表向きの説明で、昭和七年の秋ごろ、関東軍の司令部のある奉天や首都のある新京付近の治安悪化は深刻だったのだろう。地方支部の心配は、あながち杞憂ともいえなかつたのだ。

例えば学童使節が奉天を訪れた一週間前の一〇月九日、満州国は「差当り治安が第一です、政府及軍部はこれに力を注ぎ、この暮れ中遅くとも来年初めまでに全部片付けて仕舞ひたい」、と満州国参議駒井徳三は

篠原に語っている。<sup>(37)</sup>

さらに『満州日報』(九月二四日朝3)は、「匪賊騒ぎに脅へ／渡満者激減」という見出しのもとに「満洲国成立するや一時急激に渡満者の数が増加したが、九月に入ると治安悪化のために満州への渡航者が激減した、と伝えている。同紙によれば奉天駅の通過人員と降者人員客統計でみると、四月中旬のピーク時は六万四二六人だが、九月には一万六四四五人も激減している。「毎年この秋期に入ると旅客団体数が増加するのであるが、今年はバツタリ止んで」いる。「渡満者が匪賊襲撃の声にいかに二の足を踏んでゐる」かがわかる、と伝えている。

この時期の学童使節の派遣は、危険と隣り合わせであった。

#### 匪賊と治安

匪賊は軍閥等の正規軍以外に武力的な抵抗をする人々をさす日本側の呼称だが、その実態は多種多様であった。篠原が十余年以上前から知り合いの第一〇師団長の広瀬壽助中将をハルピンの司令部に訪ねたところ、自宅の夕食に招待され、大いに語り合うことになった。広瀬は満州事変勃発後、昭和六年一二月に第八混成旅団を編成し、吉林省で掃討戦を実施した人物である。つまりプライベートな席で交わされた現場の話だけになまなましい。

広瀬に言わせれば、昭和七年五、六月の満州の治安はもともと激しかった、という。治安を乱す連中は三種類で、反政府軍、匪賊、馬賊だ。反政府軍は張学良の配下にあつたもので、匪賊は、紅槍会、大刀会等の名前があるが、皆大同小異だ。彼らは宗教的迷信による団結で、村から若干の金を提供され村落の自衛にあたり、農村の若者も多く加入している。馬賊は石川五右衛門式の輩、つまり盗賊だという認識を示している。

反政府軍は、「素質よく、武器、被服、訓練もよく、将校兵士もよし、之に次ぐものが武装からすれば馬賊、匪賊は武装悪し、人数三百人に付

き八十挺しか銃」を持っていないありさまだ。ただ匪賊は気の毒な点もあり、元来馬賊のような泥棒ではなく、政治上は驚くほど無知で、いまでも清国がある思っているほど時事に疎い。誤った宣伝に踊らされているだけで、満洲国建国の主意を理解すれば、「よくなり得る、之は好んで討伐することを避けて居る」<sup>(38)</sup>、と広瀬はいう。

(匪賊は) 軽機関銃、小銃の並んでる奴の前に平気で来る、日本軍が十倍居つても怖がらぬ、そして三百、五百の人数で、喚声を挙げて進んで来る、文字通り全滅する、山伏見たやうな隊長から祈禱して貰つて、何か飲むなり、又は祈禱したジャガ芋などを一つ懷中して来れば、決して死なぬと云ふ強い迷信を持つてゐるのだ、夫れ程無智なのだ、たゞ殺すのも可愛いそうなので、無用の討伐は避けて居る<sup>(39)</sup>

ただ日本の本州位ある地域を今の部隊で担当するので、討伐するのは限界があり、「無条件で降参すれば、各私有財産は許して降参」は受け入れるという方針で帰順を促す。正規軍で帰順したものは再教育できるし、匪賊は根が泥棒ではないので自警団をやらせれば始末がつくが、馬賊はブローカーに手当をやり帰順させても、陰で相変わらず同じことをしている。現兵力では治安を完全にするためには、相当時日を要する、という見解を広瀬は篠原に示している。

#### 国民融和の必要性

満洲国樹立後の関東軍は、昭和七年四月第八師団(弘前、師団長西義一中将)、第一〇師団(姫路、師団長広瀬壽助中将)の主力が増強され、五月には上海から第一四師団が(宇都宮、師団長松本直亮中将)が転進し、これが中心になり匪賊討伐に東奔西走した。しかし、広瀬の言うよ

うに、少女使節が派遣された建国当初の五、六月頃は、相当混乱していたようだ。

例えば、一〇月六日奉天居留民団長野口多内は、「治安維持に就て、之が最大急務です、昨今では匪賊の被害は軍部発表以外は掲載禁止されて居るが、発表されぬことが沢山ある、非常に不安、附属地から一步も外へ出られぬ<sup>(40)</sup>」と話している。(ちなみに使節一行は、この一週間前に野口に会っている。)

同じく奉天の東亜勸業株式会社社長向坊盛一郎は、次のように語る。

私は十四五日前北陵見物に行つた、ゴルフ場の側を通ると、煙草を吸つてた百姓らしいのが、通行人にピストルを向けて何か奪つて居た、これには驚いた：市中では日中は出ないが、場所に依つては市中でも夜は嫌がる、附属地以外は危ない、附属地でも危ない、こんなことは満鉄創始以来初めてだ、切めて学良時代位治安維持を望む<sup>(41)</sup>。

さらに向坊は、これは満州事変で奉天の張学良(一九〇一―二〇〇一)の軍隊が満州全土へ散らばり、大きなものは討伐され、さらに小さくなり分散し、「結局こつちを追へばあつち、あつちを追へばこつち」と始末がつかなくなった結果で、三、四の師団で討伐できるはずがない。これ以上軍隊を増やせないのであれば、せめてまず奉天省の治安を固めて欲しい、と述べている。そしてその解決策は彼らを如何に惹きつけるかにある、「要は兵隊や馬賊が食ふことが出来ればい、のだ<sup>(42)</sup>」という

反日、抗日の原因は、武力侵攻や経済上の問題だけでなく、日本人の傲慢な態度にもある、と前出の広瀬は語る。

：満州国に無限に不真面目な者が入つて来るのは困る、今居る不良

の一萬や二萬は追ひ返せ：まづいことには悪いことは日本人に対してはやらぬ、満洲国人に対してやる、満洲国人は満洲国の警察に訴へるが警察は遠慮して日本側に云はぬ。：更に悪いのは吾々は向ふも尊敬するし、こちらにも謙遜する、処が悪いのは紳士も苦力も見分けなく支那人を侮辱する、これが為め四月以来反日の気分が漲つて来た：町の中で支那の立派な婦人にからかふ、停車場で入場切符も買はずに入る、何だ俺の顔を見ろ日本人だぞ、と怒鳴る、汽車の一等室へ入る、私の所の参謀長が見て来た、食堂車を占領して大酒盛りをやる、拳を打つ、歌を歌ふ、：あるとき日本の商人が大風呂敷を背負つて乗車しやうとした、満洲国人の相当な服装をした男が行き合ふた、双方客車の入口に暫く立つて居た、するとイキナリ商人がポカッと打擲つた：ハルピンの郵便配達が居た、日本人が来て、その中に俺の郵便があるだろう、見るから下せと云ふた、それはいかぬ、と云ふことから殴つて大怪我をさせた<sup>(43)</sup>。

当時渡満した日本人の行状には多くの問題があった。建国直後の満洲国は治安悪化に加えて、利権をもとめて素行のよくない日本人が満州に渡るなど、反日感情は悪化していた。日満両政府も国民的なレベルで融和をはかる必要性を認識しており、その意味では大人の世界の醜さを覆い隠す子供の利用価値を認めていたのだろう。

だからこそ純粋な学童使節が日満の平和と友好、さらに五族協和(日本・朝鮮・満州・漢・蒙)を訴え、両国民の融和をはかることは、政治上も大きな意味があった。その広報の手段として大人にはできない国家的な使命を与えられたのだ。ちなみにリットン調査団の報告書が公表されたのは、学童使節たちが、武藤と謁見した二日後の一〇月二日であった。

### ③ 学童使節の帰国―朝鮮から国内へ

#### (一) 朝鮮での交流

##### 衛戍病院での感激―軍隊への尊敬と憧れ

満州国での予定をおえた学童使節たちは帰路、朝鮮の京城をはじめ、各地に立ち寄り、「朝鮮の少年少女に告ぐ」という永井拓相のメッセージを伝達し、朝鮮の子供達との交流をはかる〔『東日』一〇月七日朝3〕。

一〇月四日国境をこえた使節は、午後八時四〇分大歓迎のなか平壤駅に到着する。官民の有力者、若松小学校(日本人)、若松普通学校(朝鮮人)の上級生が手に手に小旗をもって出迎え、列車をおりと万歳の声が駅構内を揺るがし、平安南道知事令嬢から花束をうけ、その日は旅館に入る〔『京城日報』一〇月六日朝4〕。

翌日は衛戍病院、平安南道庁、平壤府庁を訪ね、平壤府主催の交歓学芸会に臨む。とりわけ最初の衛戍病院が、国家的な使命感に燃えた学童使節たちの心に大きな印象を残したようだ。

衛戍とは軍隊が永久的に駐屯している土地で、衛戍病院はそこに設置された病院のことだ。従って、戦闘で負傷した数多くの兵隊が収容されている。そこで親しく兵隊にお目にかかり、匪賊討伐の苦心を聞き、血なまぐさい戦跡をたずねた使節の目には「名誉の負傷をしてここに静かに休んで居られる兵隊さんに厚くお礼を申しあげ おなぐさめ申すことの出来たのは非常によろび」だった。東北代表の松岡少年は、負傷兵をみて「知らず知らず頭がさがり あつい涙が一杯にあふれた」という。そしてそれは松岡だけではなかった。

藤ノ木さんが御挨拶を申し上げてゐる時だった。挨拶をのべてゐ

た藤ノ木さんの声が 急にふるへて来た。はつと思つた僕は 涙にぬれた顔をあげると 泣いてゐるのだ。藤ノ木さんが 感極つて泣いてゐるのだ。一同皆うつむいて 涙にくれてゐる。僕は流れ出る涙を止めかね 声も出ぬまでに感激してしまつた。中村大尉が謝辞をのべられたが あの時のお言葉は 一語々々はつきりとおぼえてゐる。おそらくは あの感激の状況と共に永久に僕の記憶に残ることだらう。(二二頁)

少年・少女の別なく、学童使節たちは軍隊に対する異様なまでの尊敬と憧れ、そして同情につつまれてゐる。もともと松岡は、満州事変の主力の第二師団のある仙台の代表であり、特別に同師団の将士への絵葉書を託されていた。さらに東京代表藤ノ木清子(一二)は、日本橋千代田尋常小学校五年生で、父は浜町で自動車商會を經營しているが、日露戦争の経験者であった。清子の父は娘が使節に選抜された喜びを取材に來た新聞記者に、「かう見えても私は日露戦争の従軍者で、満洲には十ヶ月ゐました、そんな關係で折に触れては家のものに満洲の話をして聞かせることがあり、これも娘を刺激したらしいのです」〔『東日』九月八日朝8〕と語っている。もちろん彼らの生い立ちも關係していたのかもしれないが、他の感想文や一連の行動をみても、使節たちの軍人への憧れに大差はない。

さらに平壤公会堂でおこなわれた交歓学芸会のプログラムをみると、若松小学校五年男子による「一 児童劇 国の祝」は、「合唱と共に開幕 満洲国独立及び東洋平和を語り 児童(学童)使節の労を謝し一同合唱団樂の中閉幕」。山手小学校六年女子のよる「四 児童劇 愛は輝く」は、「満洲国は支那から離れて独立しました。列国に承認を求めますがとり合つてくれません。日本は只一人の同情者として 真先に承認しました。その経過を先生と子供と共同して劇にしたもの」(二三

〔四頁〕であった。このような軍人に憧れる意識は、学校教育や家庭をはじめとする社会環境のなかで培われたものだろう。

### 朝鮮青少年少女へのメッセージ

その日の遅く一行は、朝鮮総督府のある京城（現…ソウル）に到着する。『京城日報』（一〇月六日）は「元氣浚刺として 学童使節一行京城へ 盛んなる駅頭の光景」として大きく報じている。  
そこで引率者上沼久之丞は、

（少女使節の答礼に少女ばかりか少年を加え学童使節を派遣したので）満洲国から少年代表者も日本へ引つ張らうといふ心算です：向ふの大歓迎には全く驚ろかされました：満洲を通つて朝鮮に来て面白いのは子供が朝鮮に来るとスツカリ内地と同じ様な（ママ）気がすると言つてゐます、そして学校で教へられたり話や本で知つた朝鮮が予想以上に内地と変らないと云ふことを子供達が驚ろいてゐる様です

と語っている。そして朝鮮神宮、総督府等を訪問し、その後の朝鮮教育会主催の歓迎会で、永井拓務大臣からの託されたメッセージ「親愛なる朝鮮の青少年少女諸子に告ぐ」を読み上げるのだ。

日本帝国の国是が東洋の平和と東洋諸民族の共栄とに在ることは今更私が説明する迄もあるまい。嘗て日本と朝鮮とが相合して一体となつたのも此の大目的を共同の力で達成せんが為めに外ならないのである。合邦以来二十有余年 朝鮮に於ける文物の発達は目覚しいものがあり 凡ゆる方面に於て昔と比して面目を一新するに至つたことは真に歎ばしいことである。然し諸子の愛する此の朝鮮を更

に輝かしい楽土とすることは新しい時代を負ふ若い諸子の責任であり使命であつて其の為には諸子一人残らず志を同じくし力を合せて此の尊い使命を果すことを怠つてはならぬと思ふ。（後略）（三六頁）

日韓併合は東洋平和と東洋諸民族がともに栄えるためであり、併合以来二〇数年の間日本のおかげで朝鮮は近代化したのが、これからの発展は日本国民である朝鮮の青少年少女が日本の子供と力をあわせて使命を果すことにかかつている、と永井は言う。

『京城日報』（一〇月七日）は、「日本学童使節一行 壽松公普校で 内鮮児童の交歓会 童心が結ぶ固き友情」という見出しのもとに、メッセージの続きを紙面で次のように要約している。

第二の日本国民の親善と健全なる発達に対して第二国民の覚悟と、東亜に生れたる新満洲国とはどこまでも一致団結して東洋の平和、民族の共栄を高潮し、今後は内地、朝鮮、満洲の青少年少女の一大親和を計る事を帝国のため 天皇陛下のため第二の国民たる諸子に切望する

これを東京代表高野道雄は、元氣一ぱいで明朗声高らかに内地八百万の児童を代表して読み上げた。歓迎会終了後、使節は放送局に向い、翌日は李王家のお茶会、朝鮮総督総監婦人のお茶会の後、仁川、釜山などでも交流を深め、一〇月一〇日朝七時に連絡船で下関に着き、ここに使節は無事に帰国を果たすのである。【写真六】



写真6 京城でのメッセージ朗読  
【『学童使節満洲国訪問記』より】

## (二) 国内の熱烈な歓迎と解団式

### 強行日程―下関から広島

下関港についた一行は、船内で食事をすませた上で、下船の準備にとりかかる。埠頭は市内の小中学生のもつ日章旗と毎日新聞社の旗の波に包まれている。そして下関市長以下の歓迎をうけ、「一五人の男女の可愛い使節達はなつかしい内地の晴れの帰朝第一歩の感激に小さい頬をりんごのやうに紅潮させながら上陸」する。市が用意した車で、赤間神社に参拝し、敬虔な帰朝報告をした後、子供たちとの交流もはかる『大毎』一〇月一日夕<sup>2</sup>。そして九時の急行で広島に向かい、午後一時三九分到着する。

ここでも各方面の歓迎攻めであった。駅では県や市の関係者、大毎支局、小学校校長をはじめ約千名の児童の歓迎だ。その印象を横浜代表小笠原秀子は、「プラットフォームは大旗小旗を振りかざしたお出迎への人で黒山をきづき 萬歳の声は百雷のやうでございました。停車すると人々が一度に押し寄せ 私共は 漸くフォームに降りることが出来ました。あちらからもこちらからも『御苦勞様 御目出度う』の言葉をあびせられました。」(一四四頁)と記している。

学童使節たちは、謝介石から贈られた満州服を着て、駅に降り、歓迎会、県庁、市庁、第五師団等を訪問し、子供たちの満州服姿をみた師団長が「これは俺が会ふ人とは違う」と入口でとまどい、宇品港では行き交う人々が使節たちの満州服を物珍しげにみる。そして幼ない子供たちは、中国人か、日本人かで押し問答をするなど、使節たちの満州服姿はすべて大衆に見せることを意識した演出であった。

午後五時四〇分、広島放送局に到着し、帰朝報告のためのラジオ出演、その後六時三〇分開会の広島県、広島市主催の「歓迎晩餐会」に列席するが、忙しい使節たちに広島で一泊する余裕は残されていなかった。

「出発まではしばらく時間がありましたので」旅館で「私達を休ませて下さいましたが昼の疲れでぐつすり眠って居ますと『さあ出発の時間ですよ』と呼び起され びつくりして飛び起き大急ぎで支度を整へ駅へかけつけ」た(一四八―九頁)。

時間は夜の午前二時過ぎ、真夜中にもかかわらず大勢に見送られ広島を立つ。朝食後、汽車の中で大阪でのプログラムにあわせて、皆交替で挨拶の練習をしていると、途中の神戸駅でも日満の国旗が振られていた。そして朝九時四〇分に大阪に着き、休む間もなく歓迎会に臨むという、かなり強行日程である。

### 使命を終えて―大阪から東京へ

『大毎』は、学童使節が到着する前から、過熱気味にその動静を伝えている。

「誉れの学童使節 重き使命果して けふ大阪入り」

大阪市代表を出した各小学児童をはじめ多数の人々が大阪駅頭に心からその労をねぎらふほか市内三十万学童の空を守る心の結晶である学童機も大阪入り後はじめての飛行として一行の列車を神戸まで出迎へ三万枚の五色歓迎ビラを降らすはず：『大毎』一〇月一日朝11」

学童機とは、大阪の学童の献金で作られた飛行機らしく、それが学童使節の大阪入りを空から出迎えるという演出をしたのである。そして使節たちはここでも満州服に着替えて、終日行動する。「満州服誇らかに輝く大阪入り 空に舞ふビラ、地に沸く歓呼 期せずして『御苦勞様』の声」、大阪毎日新聞は満州服姿で行進する使節の写真を大きく掲載し、次のように報じている。



写真7 『大阪毎日新聞』  
1932年10月12日夕刊2面

…可憐なわれらの使節たちが満洲服姿凛凛しくフオームに降り立つた!! 期せずして起る万歳、「有難う、御苦労様!」の声、父兄も先生も握手、抱擁、また万歳だ!折しも秋空高くひびく爆音、木津川飛行場を離陸した大阪学童機BDUG!…歓迎飛行だ、五色の歓迎ビラ三万枚が美しく使節たちの頭上に降れば、本社旗を振って答へる地上の一千大衆!!まさに空と地との歓迎大旋風が起る…『大毎』一〇月一二日夕2【写真七】

『大毎』の地元である大阪の歓迎は、他の地域以上に熱狂的であった。帰国後の過密日程も手伝い、使節たちは疲れ切っていたようだ。名古屋代表小栗房子(一三)は、次のように記している。「私達がいそがしい大阪訪問の一日を終つて金龍館(旅館)へもどつたのは秋の日もつつり暮れた夕方でした。朝からあちらこちらと御挨拶に上りすつかりつかれてしまひました。しかし明日はもう名古屋です。」「(二五二頁)その夜は帰国後ではじめての自由行動で大阪代表の子供たちは帰宅したが、翌日はまた汽車に乗るのだ。

目まぐるしい帰国後の日程は、名古屋でも変わらなかった。翌一二日の夕方名古屋に着き、同市主催の歓迎式と市長招待の晩餐会の後、翌一三日午前中はようやく休養だ。しかし午後から名古屋城の見学などをへて大毎支局招待会の後、夜行で名古屋を立つ。一〇月一四日午前九時に東京駅に着くが、広島代表小島君子(一三)は、感慨深く、

また複雑な心境を述べている。(なお下線部は引用者…以下同様)

今日は十月十四日で使命を果す最後の日である。無事に使命を果して家に帰れるのだと思ふと嬉しいが、しかし出発してから二十幾日の間を先生方とお父さんお母さんのやうに、又使節一同は兄弟の様に楽しい旅を続けて来たのに、もう別れなければならないのだと思ふと、何だか淋しい様な何とも言ひ様のない色々な気持が、ごつちやになつて妙な気分だ。…もうぢき東京だ。何時もなら満洲服に着換へるのだが荷物を駅へ送つたので着いたら駅長室で着換へる事になつてゐる。見える見える大旗小旗の波が盛んに動いてゐる。万歳々と云ふ声がだんだん大きくなる午前九時汽車は東京駅に着いたのだ。あの広い駅の中が人で一ぱいだ。まるで人の波だ。皆さん有難うと感謝しつつ駅長室へ行つたがまだ満洲服が届いてゐない。残念ながら制服のまま自動車で宮城へ向つた。」「(二六〇～一頁)』

使節たちは、日本国内では満洲服を着て凱旋することが演出として仕組まれていた。少女使節が駅に近づく満洲・朝鮮の民族衣装に着替え、公式行事に臨んだことを別稿で紹介したが、満洲服姿の日本学童使節は日満親善を大衆へ訴える格好の題材であった。両者ともに視覚イメージを意識した演出であったといえるだろう。大阪到着を報道する『大毎』『東日』の紙面は、それをよく物語っている。ただ東京では手違いがあり、それが間に合わなかったのだ。

使節たちはそのまま宮城(皇居)に向かい、明治神宮、靖国神社参拝、東京市長を訪問して、東京日日新聞社に着き、ここでようやく満洲服に着換える。ところが昼食後、各大臣訪問のために自動車に乗り込もうとした矢先、突然車から降ろされた。そこに立っていたのは、「頭の真白とても可愛らしいお老爺さん」で、彼は自分の孫のように使節の帰りを



写真8 使節の帰京・満州服姿の記念写真  
[『サンデー毎日臨時増刊昭和7年写真大観』より]

喜んだという。それが徳富蘇峰であった(「一六一頁」)。  
陸相、首相、外相は会議中で直接会えなかったが、文相、拓相をはじめどこでも満州服をほめられた。そして一ツ橋高等学校で最後の報告会が終わったのが午後七時頃、次の解団式で「私達の使命のすべてこれでめでたく終りを告げた」のだ。心が軽くなるとともに、なぜだか名残惜しい変な気持ちになった、という。【写真八】

：神田一ツ橋小学校の歓迎会を終へて愈々解団式場へ向ふ。：(会場の帝国教育会館の)玄関に立てられた午後七時より解団式云々の立看板を見た時 限りない嬉しさと言ひ知れぬうら淋しさを感じた。：結団式を挙げてから二十八日間 実にあはたらしい旅であった。其の間の種々の出来事を顧るとき：只感慨無量である。室には既に迎への先生方や父兄の晴やかなお顔が並んで見えた。一同揃つて最後の決別の晩餐会が始まつた。(「二六七頁」)

付添の大阪船場小学校訓導田村千世の挨拶は、子供たちの将来についての注意にまで及び、途中から言葉は涙になり途切れ、ここかしこですすり泣きの音までした。引率の上沼をはじめ、来賓席も父兄席も咳一つなく水を打ったような静けさであった。各方面にだしたとおもわれる挨拶状の最後

は、次のように結ばれている。「因にこの度の大任にあたりたる学童たちには家庭 学校と相はかり一層日満親善のために尽さしめこれと同時に余り人気者となりたるため うぬぼれに陥ることのないやう導いて居ります何卒御安心願います」(「一七〇頁」)。優等生ぞろい学童の一人は、それに答えるかのように、感想文を記している。

身命を賭して尽す 北陸代表 荒川宏(一三)

：我が国八百万学童中より選ばれての 此の名誉は僕には全く余りにも重いものに感ぜられたが 僕の出来得る限りの努力を尽してやり遂げやうと深く決心した。：(出発前金沢で多くの人の激励をうけて)今更ながら如何に僕の使命が重大であるかと言ふことを考へると共に たゞ「感謝と感激に」有難う「きつ」としつかりやつてきます。」と繰り返した。：僕達の使命は確かに重大なものであつた。その重大さを考へて見る時果して僕達はその使命を充分果たしたかどうかといふ事を考へさせられるが併し僕は自分として出来得る限りの事を為して事に当つた積りである。日本男子として決して恥しからぬ行ひを為した筈である。僕は今後其この心持を以て世に処し我が大日本帝国の為め身命を賭して尽す決心である。(「一八三〜五頁」)

私共が偉いのでない 九州代表 山口文二(一三)

私が此の度使節の一人として選ばれたのは 明治維新後西郷隆盛を始めとし 多くの偉人傑士を出した此の薩摩に生れたからであります。私共が満州や朝鮮に於いて 執政閣下を始めとし 謝外交総長 宇垣総督閣下に 其の外多くの大官の方々にお会いすることができ 交歓会等を開く等いろいろと厚いもてなしをうけ いろいろの珍らしい所や 普通の人なら行くことのできない所までも見せてゐたゞきました。これは私共十五人がえらいのでないと信じます。

全く万世一系の天皇をいたゞいて世界無比の国体をもつてゐる日本帝国を代表して行つたからであります。又無事に使命を完うし元気で帰ることのできたのは 附そひの先生方の御苦心と御教訓のおかげだと深く感謝してゐます。：〔一八九―一九〇頁〕

使節たちの心情は、ここに集約されている。純粹で、そしてその時代の価値観に染められた心の内が吐露されているのである。こうして解団式は終わった。

：一同いよいよ最後の別れの言葉 抱き合ふもあり 握手するもあり 又の会ふ日を約して それ／＼父兄に伴はれ 或は家路に或は宿舎に引上げた。僕もやさしき校長先生に助けられつゝ父の手に抱かれて宿舎に帰つた。運ぶ足も心持重い。：〔一六九頁〕

使節一行の親しみを永続して会合を毎年一回ぐらい開き、「今回の名誉を永久にそこなふことなく、日満親善の実をあげ」たい。そのために皆で話し合い、龍鳳会という団体をつくり「再会を期して西に東に別れた」〔二三三―四頁〕。その後使節はそれぞれの故郷に帰り、熱烈な歓迎をうけたことは、別稿で述べたとおりである。

#### ④ 学童使節の影響―少女から少年へ

##### (一) 学童使節のその後

###### ―日満親善人形使節から皇太子奉祝学童使節へ

『日本学童使節満州国訪問記』には、最後に上沼久之丞による「会計報告」が記されている〔二三七―八頁〕。

##### 収入の部

一 金参千九百六拾七円也

##### 内訳

金壹千五百円 全国連合小学校教員会補助金

金参百七拾五円 監督教員選出団体負担金三名分

金五百円 付添者負担金二名分

金壹千貳百円 使節選出団体負担金十五名分

金貳百四拾円 寄付金三団体分

(東日 老松後援会 千代田保護者会)

金百貳円 東日大毎両社負担金

金五拾円 東京市小学校教員会寄付金

全教連関係者の支出は、全体の七八・八%に対して、『大毎』・『東日』側の負担金は一〇二円、つまり三%に満たない。寄付金三団体一四〇円のなかに『東日』も含まれているが、それと引率の西村真琴分を勘案しても、その支出は全体のなかで微々たるものであった。主な支出は乗車賃・乗船賃・宿泊・弁当代等、そのほとんどが旅費・滞在費だ。学童使節の結成から選抜・派遣まで、企画・実行・経費などあらゆる点で、全教連側が主導していたことがわかる。話題性に富んだ学童使節の報道を独占した『大毎』・『東日』側にとって、ある意味では収益性の高いイベントであった、といえるだろう。

昭和七年一〇月から一一月にかけて、満州国からさまざまな使節が相次いで来日する。満州国承認に答えて派遣された同国答礼使謝介石(一〇月一八日入京)、満州国文教部教育視察団(一〇月一九日入京)、満州国婦人連合大会特派使節(一〇月二八日入京)、日本の少年団旗授与式参列のために東京に訪れた童子団(少年団)(一一月二三日入京)等である。その際東京を中心に横浜・関東代表の五人の学童使節が歓迎会に出向き、

満州服を着て接待した(二二四頁)。それは大阪も同様であった。

一〇月一九日、謝介石は天皇に満州国三千万国民を代表して新国家承認の御礼を述べ、同二四日、日満親善大交歓会を開き、二八日大阪駅に着き歓呼の中、駅の貴賓室に入る。そこで満州から帰ってきたばかりの「学童使節三好忠幸君と西尾幸代さんが謝介石氏から贈られた満洲服を着て」挨拶し、「一同に可憐な感激の情景を見せた」(『大毎』一〇月二九日夕一)という。ここでも使節のたちの満州服が演出に使われている。そして「満州国婦人連合特派使節」は、大阪では朝日会館、東京では東日講堂で歓迎茶話会を行い、「童子団(少年団)」には『東日』から記念章が付与されるなど、ここでも新聞社は積極的な役割を果たしている。

これ以降の子供や少女を中心とした大規模な日満交流の事例を探すと、昭和八年(一九三三)五月、満州国建国一周年の記念として文部省、拓務相、東京市の後援で日満中央協会附属日満婦人協会が派遣した「日満親善人形使節」をあげることができる。使節は、団長松平俊子をはじめ、小学校三年生の少女三名(正使一名、副使二名)、女学校生代表一名を中心に総勢一七名であった。その目的は、執政溥儀と満州国の建国功勞者に「やまと人形」(市松人形)六〇体を贈呈し、両国の親善をはかり、「満州国人経営の諸学校に贈呈併せて皇軍日夜の御奮闘に感謝の意を表する」ことを目的としていた。女学校生代表少女は、熱河省の掃討戦の主力の一つである第八師団長西義一中将の娘で、人形の衣装は東京の主な女学校四四校によって製作された。さらに各人形の胴には、文部大臣で日満中央協会総裁鳩山一郎の揮毫による「共存共栄」の文字を記した紙が巻かれていた。<sup>(45)</sup>

同使節は、特定の新聞社が主催や共催などに関係していないこともあり、大新聞をはじめ各紙がこぞって記事に取り上げ、人形・少女というソフトなイメージも手伝い、少女使節・学童使節にまさるとも劣らない世間の注目を集める。昭和七年五月から昭和八年五月ごろまでの一連の

「満州国少女使節」「日本学童使節」「日満親善人形使節」をみると、「子供(少女)」による平和使節が、建国間もない満州国の対外宣伝とイメージ戦略の一環として利用されているのが分かる。

しかし日本が国際的な孤立をますます深めると、その様子は微妙に変化をはじめた。そのきっかけが昭和八年一二月の皇太子(現天皇)の誕生である。昭和九年(一九三四)一月以降、皇太子誕生を祝う、小学生を中心とする二つの大きなメディア・イベントが試みられている。すなわち『大毎』『東日』が同時に企画実行した、『大毎』主催「奉祝帝都訪問」と『東日』主催「奉祝伊勢大神宮参拝」及び朝鮮の『京城日報』、『毎日申報』社主催「皇太子殿下降誕奉祝学童使節」である。

## (二) 東西の男子小学生の交流

### ―「奉祝帝都訪問」「奉祝伊勢大神宮参拝」

皇太子誕生翌日の一二月二四日『大毎』『東日』の紙面には、早くも「皇儲御誕生奉祝」として、「児童映画(トッキー) 脚本懸賞募集」とともに、小学生を中心とする「奉祝帝都訪問」「奉祝伊勢大神宮参拝」の三大計画が発表されている。これはあらかじめ皇太子の誕生を予想して準備されていたのであろう。

帝都訪問の奉祝学童団編成／京阪神代表「費用本社負担」

／我社の「少国民奉祝」三大計画

皇太子殿下御降誕！われら国民はたゞ／歓喜と感激あるのみである、中にも第二の国民たる小学児童の小さい胸に溢る、歓喜とその美しの叫びよ、本社はこの少国民の奉祝のよろこびを捧ぐべく左の計画を発表することを光榮とする(『大毎』一九三三年一二月二四日夕一)

「奉祝帝都訪問」は京都・大阪・神戸の全小学校より一校一名の優秀学童四一九名を選び、昭和九年一月三日出発、四日入京、五日帰着の日程で帝都を訪問するもの。「奉祝伊勢大神宮参拝」は、東京・横浜の全小学校から前者と同様に選ばれた五八六名をはじめ、総勢六四〇名が伊勢神宮を参拝する計画（『東日』一九三三年二月二四日朝11）であった。こちらは四日出発、六日帰京の日程であり、四日宮城（皇居）前で、東西代表の学童団が合流して万歳をするのが、『大毎』『東日』の主目的であった。

三日午後の神戸班・大阪班・京都班が各小学校長・教育関係者・少年団等の多数の見送りをうけて、それぞれの駅から奉祝特別列車に乗り込み、四日の朝東京に着く。新聞社が手配した車二〇台に分乗し、日比谷公園で降り、少年団健児音楽隊に先導され、午前八時に宮城に到着し、伊勢に出發する前の東京、横浜の児童五五六名と合流する。関東団は右に、関西団は宮城に向つて左側に、少年団の奏する行進マーチに足並を揃へて入場一同最敬礼を捧げ音楽隊に合せて君が代を合唱し、牛塚虎太郎（一八七九～一九六六）東京市長の発声で約千名もの小学生が「三陛下ならびに皇太子殿下の万歳を奉唱し再び最敬礼」し、その後東西学童交歓会に入る。【写真九】

「牛塚市長の『おめでたう』の言葉につこり笑つて童心こめた交歓文を取交し固い握手が行はれ二重橋橋畔に美しい童心交歓のシーン」が描かれた（『大毎』一九三四年一月五日夕2）。そして関西団は宮内大臣、靖国神社、東郷元帥邸訪問、陸、海、文の各大臣を訪問する。元帥邸では平八郎の孫一雄（一六）が祖父に代わつて挨拶をするという演出もあった。午後は明治神宮、『東日』本社や東京見物、その日の午後五時五十分の列車にのり、翌朝に帰省する、車中二泊の強行日程であり、もちろん費用は『大毎』側の負担だ。【写真



写真9 学童交歓会  
〔帝都訪問学童団記念写真帳〕大阪毎日新聞社  
1934年2月15日より



写真10 藤田海軍中將の訓示 一 海軍省にて  
〔帝都訪問学童団記念写真帳〕大阪毎日新聞社  
1934年2月15日より

一〇】  
そして『大毎』は、この「思ひ出深き数々の場面を集めて」記念写真帳（非売品）を作成している。その序文で、皇太子の誕生は国民の生涯忘れることのない歓喜と感激だが、なかでも「第二国民である小学児童の喜びはいかばかりであつたでせう。」ここに「溢れる小国民のまごころこそ吾が帝国の将来を担ふ大きな力となることと信じます<sup>(46)</sup>。」と記されている。

皇太子誕生を契機に児童や母性に対する教化と養護に関する資金を天皇から下賜され、恩賜財団愛育会が設立されるのもこの時だ。社会の子供への注目が増し、そして財団法人大阪毎日新聞社社会事業団も「保育学園の新築」「婦人セツルメントの新設」「母子軽費診療所の開設」を三大記念事業として計画（『大毎』一九三三年二月二五日朝1）している。そして『大毎』『東日』側は日本学童使節の成功体験も手伝い、小学生を主役にしたイベントを計画したのであろう。

写真帳の最後には、「学童団行程」とともに「学童団名簿」に「代表

者大阪毎日新聞社事業部長世川憲次郎」以下全児童の名前が掲載されている。しかし、ここにはもはや女子の名前はない。東京・横浜・大阪・神戸・京都の五大都市の各小学校代表として選ばれた東西の学童使節は、すべて男子であった。帝国の将来を担うのは、国を守る兵隊となる男子だからであろうか。

### (三)「奉祝学童使節」―朝鮮からの学童使節

#### 『京城日報』の主催

さらに『京城日報』、『毎日申報』社は、「皇太子殿下降誕奉祝学童使節」を派遣している。ここには日本帝国を一体化するために、朝鮮を日本の一部として精神的にも完全に併合する必要がある、そのために未来の子供たちの交流の一環として朝鮮から学童使節が計画されたのだ。その統合のシンボルとして、皇太子誕生は格好の題材であった。

『京城日報』は朝鮮の中央紙であるとともに朝鮮総督府の機関紙であり、『毎日申報』は、明治四三年（一九一〇）の日韓併合後に、『京城日報』が経営を引き継ぎ同紙の姉妹紙として発行されたハンゲルによる新聞だ。これらは「総督府の広報紙の役割」も担っており、日本人、朝鮮人に対する「植民地政策宣伝」のためにつくられた新聞であった。<sup>(47)</sup>

昭和九年二月一三日朝刊七面の『京城日報』には、大きな囲み記事で「帝都訪問奉祝学童使節」の予告が掲載されている。皇太子誕生を祝い「小学生代表として、京城府内の官、公、私立小学校、普通学校の優良児童三十二名を選抜し、外に附添教員五名、学校医一名を加へ、『奉祝学童使節』として来る二月二十日出発せしめ、三月二日京城帰着の予定：皇居を拝し、大日本帝国の萬歳を奉唱」するのだという。そして帝都訪問の後、「一行は、更に伊勢神宮に参拝し国運の繁昌を祈禱」し、奈良、京都、大阪を訪問するもので、「現下非常時局に際会し、極めて意義深き企画」だと自讃している。そしてこの広告は、同一六日、一七日の朝

刊七面に繰り返し掲載されている。【写真一】

京城府『京城彙報』は、学童使節「一同は東京市内を見学し、其の進歩せる施設と偉容に驚異の眼を見張り、我帝国の発展に心から感激した。：今回の挙は現下非常時に際し、極めて意義深き企画であつて、我が半島に於ける第二の国民たる学童として使命を果たしたるは洵に慶びに禁へない次第である。<sup>(48)</sup>」として、龍山公立普通学校校長藤好虎秀団長以下、引率者及び使節の学校名、学年、氏名を全員掲載している。

選抜された児童三十二名中小生一二名、普通学校生二〇名であり、一名を除きすべて五年生であった。なお普通学校は、国語を常用しないもの、つまり朝鮮人児童が通学する学校である。使節は日本人・朝鮮人児童から選抜されたのだ。

#### 内鮮融和の学童使節

日本学童使節が三越百貨店に制服を依頼したように、使節たちは丁子屋（日本人経営の百貨店）で「紺サージの洋服、靴下、日の丸付のリュクサック」の使節服をあつらえる。東京でのラジオ放送も決まったこともあり、『京城日報』本社で「第一回第二回と会合を重ね、公式使節としての重大な役目を果たす」よう挨拶・唱歌等の猛練習に励む（『京城日報』一九三四年二月一六日朝刊）

など、学童使節をほとんどモデルとしたような手続きを踏んでいる。

出版に先立ち朝鮮新聞社、『大朝』・『大毎』支局等の各新聞社へ挨拶、宇垣一成（一八六八～一九五六）朝鮮総督をはじめ



写真11 『京城日報』  
[1934年2月13日朝刊7面より]

め、渡辺学務局長、池田警務局長に挨拶をする。宇垣総督は「ホウ立派な使節ぢやのう」という誉め言葉とともに三列に整列した使節の前に立つ。

（引率の藤好団長が敬礼の号令をかけると）総督も丁寧に礼をする：二千萬大衆の父といふ姿である、それから、お父さんの総督は突然「内地人（日本人）の子は手をあげなさい」といふ、手を見て、「大体半々ぢやな、よし／＼仲よく元気に大切な光栄ある使命を果さなければなりませんよ」とやさしく話しかけた：『京城日報』一九三四年二月二〇日朝7]

渡邊学務局長は、「意義深き企て！」として、日本学童使節と関連して、次のような談話を寄せている。

満洲国の学童使節が来たことがある、丁度あの時、私は釜山に居たので逢つたが、大人の出来ない大きな力を持つて居ることを感じた、今回御社の計画はこの意味に於て有意義なものである。国と国との外交は老人がやつてゐるが固くなつてゐるが天真爛漫な幼い人たちが手を握ることは老人の外交にも優るものである

先年調べたものによると英国は本国と外地は子供の交歓を行つてゐる、例へばカナダの子供を本国に本国の子供をカナダにやつて教育して好績を挙げてゐる、この意味に於てこちらから行けば向ふからも来ることにならうし、童心の与へる印象は必ずや効果を結ぶと思ふ

何千巻の本による朝鮮の紹介よりもまさるもので内鮮融和の実はこの計画によつて挙げられるものであると確信して居る（『京城日報』一九三四年二月一七日夕2）<sup>49</sup>

そして松本京畿道知事「行儀よく丈夫で 大切な使命を果せたい」、伊達京城府伊「内鮮一家の礎」等の各方面からの談話を大きく紹介する。朝鮮学童使節は、皇太子誕生の祝いと共に内鮮融和を進展させる催しとして、『京城日報』が主催したことがわかる。

#### 植民地世論の形成

そして「今ぞ行く輝きの使節」という見出しのもと「さあ・見送りませう けふ零時四十分京城駅発」「輝きの行進だ、送れ友よ、半島の人々よ、ワンサと送つて、あの駅頭を埋めつくさうではないか」（『京城日報』一九三四年二月二〇日朝7）と読者に見送りを呼びかける。そして使節たちは盛大な見送りをうけ、京城駅を旅立つ。そしてその行程を『京城日報』は連日のように報道しているのだ。

さらに、旅立の日には右上四段抜の大きな囲みで、社説欄の前に「皇太子殿下御誕生 奉祝学童使節を送る」を掲載している（『京城日報』一九三四年二月二〇日朝3）。

けふ二十日―皇太子殿下御誕生奉祝学童使節として帝都を訪問する三十二人の少年諸君よ！諸君は、全鮮の学童代表として、この晴れの壮途にのぼるのである。これは諸君にとりて、一生一度のことであり、半島においては最初のことである。従つて諸君の使命は榮譽に輝くと共に実に重い。

（皇太子の誕生は日本国民の感激であり皇居で皆奉祝を捧げたいが）遠隔の地にある者は、心に念じつゝ、もそれが出来ない。諸君はこの心に燃ゆる半島全学童の心を体して、奉祝学童使節として東上、面のあたりに宮城を奉拝し、更に伊勢大神宮に参拝するほか、内地の学童と膝をまづへて共に奉祝の真心を交し、また友好の使命を完ふせんとするのである。それについては、こゝに忘れてならない一

つことがある。それは子供は子供らしくといふことである。―では学童使節よ。行けよ。萬歳。

二日夜東京に着いた使節は、翌日午前八時二〇分「二重橋前でぬかづいて」奉祝し、無事に大任を果たした。その後皇太子殿下李王家・宮内省宮内大臣を訪問し、午後から麹町大講堂で朝鮮代表児童と帝都代表児童の交歓会を行い、(いずれも留守と病気で大臣には会えなかったが)拓務省、総理大臣官邸、各新聞社を訪ね、ラジオ局に向かう(『京城日報』一九三四年二月二十四朝7)。

二月二三日東京JOKKの番組表には、午後六時の「子供の時間」に、(一)「こあいさつ」児島吉治外、(二)「うた」朝鮮学童使節団とある。

『京城日報』・『毎日申報』の支配人児島、京城鐘路小学校井上圭治、京城師範学校附属普通学校李彰熙の挨拶に続き、(二)「うた」は学童使節一同、ピアノ伴奏は引率教員李樂応だ。その内容は「イ皇太子殿下御誕生奉祝歌(文部省制定)、口鶯(朝鮮語)、ハ旭日旗の光よ」であった(『東日』一九三四年二月二三日朝6)。これを『京城日報』は、「使節の雄叫び／AKから京城へ／あす六時から」と大きく報じている。

この声を半島の父兄や学友にも聞かせたいと『京城日報』社は色々協議したが、あいにくこの時間は中継地の熊本・広島ともにすでに放送の予定が入っている。そこで東京から「直接京城でキャッチすることになったが、これは少々雑音が這入るがやむを得ないと覚悟をきめた」(『京城日報』一九三四年二月二三日夕2)。なによりも学童使節の日本からの声が、朝鮮半島の人々に届くことに意義があったのだ。

最後に『京城日報』(一九三四年三月二日朝3)の社説「学童使節帰る」を紹介しよう。『大毎』『東日』は、日本学童使節について社説では一切触れていないが、『京城日報』は二度にわたり(朝鮮)学童使節のことを取り上げている。ここからも『京城日報』が、(朝鮮)学童使節に政

治的な期待を込めていたことが伝わってくる。

皇太子殿下降誕奉祝学童使節一行重任を果して、本朝六時四十五分意気揚々として帰城す。早朝京城駅頭に挙る歓声、これ半島二十萬同胞の歓喜の声あらずして何ぞ。使節諸君！諸君が今回の行、終始一貫して赤誠と純情と節制とを以てしたること、九千萬国民の感激にして、特に諸君を直接目睹したるもの、感銘を深くしたところである。諸君今回の行や、実に六尺大人の以てよくなし得ざる純真なる印象を刻し、しかも、次代を担ふ内地学童との握手は、感激と共に鳴と親交の情を将来に亘つて永く生長の種子をとめ来つたものである。長途旅行中の諸君の心労所労は多大なりしものあらむも諸君が遺し来れる足跡と行跡とは永く歴史に記憶せらるゝに相違ない。こゝに諸君の労を謝すると共に、心からなる歓迎の意を表明するものである。

日本は朝鮮の植民地統治のために「国内外の言論活動に非常に積極的」で、その世論形成の環境作りに力をいれていた、という指摘がある。<sup>(50)</sup>『京城日報』は、皇太子誕生を、平和・友好ではなく、内鮮融和にともなう国民の団結と国威発揚のために利用したのだ。そしてその働きかけるべき第二の国民は、もはや女子ではなく男子であった。

子供使節の発想の源は、雛祭りやクリスマスを紹介した少女を中心とする昭和二年(一九二七)の日米人形交流にあった。<sup>(51)</sup>そのため子供による国際親善交流は、その実体はともかく形の上では平和と友好を目的としており、その主役は少女や若い未婚の女性であった。<sup>(52)</sup>しかしイベントの目的が対外融和ではなく、国内の団結に向かう時、同じ子供でも、その主役は少女から少年へと交代するのである。

## おわりに

満州事変を契機とする一連の満蒙ブームのなかで、関東軍将兵への小学生的慰問熱が高まり、「その寄贈・募集が一種の流行」になる。ただしそれは江口圭一が指摘するように、大人の世界で盛り上がった排外熱が、家族や教師を介して児童まで及んだ結果<sup>(53)</sup>だけではない。この頃子供を主題とするニュースは、すでに新聞・ラジオ・出版等の主要なジャンルを形成していたのだ。

新聞の報道合戦により、子供という存在は満州への侵略を効果的に盛り上げる戦略の一つとして利用されはじめる。日本の軍事行動を支える、けなげな子供達の行為を美談として報道することが、社会の共感を呼ぶ段階に達していた。政府や軍、現場の小学校教員の側からも、子供のあどけないイメージを大人が利用する動きが確認されるように、それを好意的に受け入れる大衆が確実に存在していたのである。

一九二〇年代半ばには、新聞・放送・出版等の発達で、文化の大衆化に大きな役割を果たしたとされるが、純粋・無垢な子供というイメージも例外ではなかった。一九三〇年前後に日本で大衆化する近代的小児観は、昭和七年三月から九月の排外熱が一段落した時期に、平和・友好という語に結びつき、それが満州国建国の正当性を確認したい国民世論に受け入れられる。このような状況が社会全体の慰問熱を煽り、後に日満融和の名のもとに、満州国少女使節を熱狂的に歓迎し、日本学童使節を誕生させるなど、子供による日満親善交流を、官民をこえて社会全体で演出するのであった。

それが文相、拓相のメッセージ持参をはじめ、首相、陸相等の主要閣僚、満州国の執政、国務総理、関東軍司令官などの要人への謁見等、軍部・政府・植民地支配層が全面的に学童使節の便宜をはかることにつな

がる。そして派遣日程が満州事変一周年と満州国承認に重なったことが、満州国関連のメディア・イベントとしての要素をさらに強め、新聞報道を過熱させ、ラジオも追従するなど、予想以上の相乗効果を生み出したのである。

少女使節の話題を競って報道した『大朝』『東朝』側を出し抜くという意味でも、『大毎』『東日』側が、日本学童使節を主催することは、報道、販売、広告を拡大させる上で大きなメリットがあった。しかも共同主催とはいえ、全教連という民間の現職小学校教員団体が主導する計画を背後から新聞社が支援する形になり、記事に取り上げやすい環境が整っていた。そして学童使節が満州侵略の正当性を大衆に宣伝するため効果的なイベントであることを、日満両政府や関東軍も認識していたのである。なぜなら日本から行状のよくない移民が多数流入し、日本人への反感が増していた満州国において、国民レベルで融和をはかる必要性があったからだ。両政府や軍は、日満の融和策としても、大衆社会の醜さを覆い隠す子供による親善交流は、政治的な利用価値が高いと判断したのである。

学童使節は名目の上では日満の子供の親善を目的としたが、その行程をみるかぎり満州国や関東軍・満鉄・新聞社ばかりか、立ち寄り先の国内外の都市の首長や役所、在留邦人団体などの訪問に重点が置かれている。さらに帰路朝鮮に立ち寄り内鮮融和をはかるなど、日満融和を唱える日本の宣伝活動の役割を担っていたことがわかる。このようにして日本学童使節は非公式ながらある意味では国家的な使命に近い性格を帯びた使節にまで拡大する。そして国民的な支持を広げ、大衆意識を国家戦略に動員するイベントへと成長したといえるだろう。

後に『大毎』『東日』は、その成功体験を、皇太子誕生を祝うイベントへと応用することになる。それは日本学童使節をモデルにした東西の男子小学生が交流するものであった。そして朝鮮総督府の御用新聞であ

る『京城日報』も、奉祝（朝鮮）学童使節を結成し、内鮮融和への世論環境を整えることに活用する。すなわち昭和九年初頭、イベントの目的が対外融和から国内の団結に向かう時、小学生を中心とするメディア・イベントは、国家への帰属意識を高めるイベントへと変化する。そして、その主人公も少女から少年へと交代するのである。男女ほぼ半々で結成された日本学童使節は、まさにその分岐点であった。

そしてこれらのイベントが発信する「アジア人のためのアジア建設」というメッセージは大人だけでなく、学童使節をはじめとする小学校高学年の子供たちにも共有されている。それは家庭や学校等を介して大人の側から一方的に刷り込まれたのではなく、子供自身が自発的に摂取するような社会状況があったと推測されるが、この問題については稿を改めた<sup>(54)</sup>。

付記 引用文には一部現代仮名遣い、常用漢字に改めたところがある。

註

(1) そしてこのような国民的規模の錯覚が生まれるにあたり、大きな役割を演じたのが、軍部とともに新聞であった（江口圭一『日本帝国主義史論 満州事変前後』青木書店、一九七五年、第五章、第六章）。

(2) 同右、一六九頁。

(3) 例えば、満州通信社社長の藤曲政吉著『満州国建国と五省の富源』〔増補版〕満州通信社、一九三二年）「満州国承認促進運動」の章には、「一協和会使節の渡日」「二満州国少女使節渡日」「三日本学童使節渡満」「四丁満州国特派訪日国民代表使節」「五駒井長官渡日」の五つが取り上げられている。少女使節・協和会女性使節から学童使節までの一連の交流が、満州国の承認促進運動として位置づけられている。本書は、昭和七年五月、満州国の事情を紹介するために出版され、さらに同年一〇月現在のリットン調査団の報告までの経緯を加筆し、一二月改訂増補版が出版された。その際『満州国承認促進運動』の章を追加したのである。序文に鄭孝胥國務総理、関東軍司令官本庄繁、内田康哉満鉄総裁、題字には駒井徳三・謝介石など満州関連の主要人物が名を連ねている。

(4) 是澤博昭「日米人形交流から満州国少女使節へ―国際交流における子供の活用―」（『歴史評論』七五六号、二〇一三年）、是澤博昭「満州国建国と子供・少女と乙女の役割 満州国少女使節と協和会女性使節を中心にして」（『渋沢研究』第二十七号、二〇一五年）参照。

(5) 是澤博昭「満州国承認と日本学童使節―小学生による日満親善の試み」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第二〇一集、二〇一六年）。

(6) 同右。

(7) 吉見俊哉「メディア・イベント概念の諸相」（津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館、一九九六年）六頁。なおメディア・イベントについては、巫坤達「メディア・イベント論の再構築」（『応用社会学研究』五一号、二〇〇九年）合わせて参照。

(8) 新聞社の主催するメディア・イベントは、自社でしか報道されなかった他の新聞と明らかに異なる紙面を作ることができ、「報道を通してその主題を宣伝し説明」する役割を果たし、「熱狂を感動的に報道すること」でイベントの主題を増幅し拡大することができる。（有山輝雄『甲子園と日本人―メディアのつくったイベント』吉川弘文館、一九九七年四―七頁。）

(9) 以下、学童使節については代表地域・氏名・年齢を記す。なお使節全員の出身学校・氏名・生年月日・父親の職業等については、前掲是澤「満州国承認と日本学童使節」の表二「学童使節名簿」を参照されたい。

(10) 山口豊「一 結団式」『日本学童使節満州国訪問記』（龍鳳社、一九三三年）三九頁。以下、同書からの引用は本文中にページ数のみを記す。また一字空けの部分は原文のとおりである。なお同書は、日本学童使節の監督・引率者上沼久之丞編纂の、二六五頁にわたる手書きの謄写版印刷の私家版である。内容は、上沼の学童使節派遣までの経緯をしるした「緒言」をはじめ、「学童使節名簿」「旅行日程」「会計報告」「訪問芳名録」の記録のほか、各地方代表の学童使節が分担執筆した結団式から解団式までの「学童使節訪問記」と「感想」などで構成されている。詳しくは、前掲是澤「満州国承認と日本学童使節」をあわせて参照されたい。

(11) 前掲是澤「満州国承認と日本学童使節」参照。

(12) 新聞の引用は「東日」「大毎」と略記し、一九三二年（昭和七年）の場合は年を略して、「東日」（九月二〇日朝7）のように、月日と朝・夕の別と掲載面の順に記す。

(13) 笹川は評論家で、『帝国文学』の編集に従事、日本近世の文学・美術に通暁していた。山田は『日本人形史』（富山房、一九四二年）等の著書のある人形研究家としても知られ、翌年満州国建国一周年の祝賀に代表少女四名とともに満州国人形使節の一員として渡満する人物である。

(14) 『東京朝日新聞』一九三三年、九月四日付号外。

- (15) 近代日本史料選書六一『本庄繁日記』昭和五年～昭和八年（山川出版社、一九八三年）二五三～二五四頁。
- (16) 前掲『本庄繁日記』、二五五頁。
- (17) 例えば、昭和七年六月「日滿中央協会」の幹部が満州国要人の訪日を要請したところ、「同国ハ前後二回二重リ閣議」を開き、はじめ謝介石の訪日を決定したが、謝は満州国の正式承認の際は公式使節として派遣するべき立場になるので、「丁交通総長ニ変更」している。「日滿中央協会ノ動静ニ関スル件」JCAR「アジア歴史資料センター」以下 Ref. B0401294100「第一八〇～一八二画像目から」「本邦ニ於ケル協会及文化団体関係雑件第五卷」(1.10)。事実、謝は一月十七日に溥儀の名代の満州国特使として日本を訪問している。
- (18) 前掲『本庄繁日記』、二五七頁。
- (19) 『吉徳商店カタログ 昭和七年』に人形の写真が掲載されている。
- (20) 前掲江口『日本帝国主義史論』、第六章「満州事変と大新聞」参照。
- (21) 江口圭一『昭和の歴史』第四卷「小学館、一九八八年」一〇九～一一〇頁。
- (22) 当時の新聞報道は「湖」を「溝」とあやまり伝えたために、このような表記となっている。
- (23) 佐藤卓己『キングの時代―国民大衆雑誌の公共性』(岩波書店、二〇〇二年)参照。
- (24) 『放送五十年史』（日本放送出版協会、一九七七年）七五頁。
- (25) 竹山昭子『ラジオの時代―ラジオは茶の間の主役だった』(世界思想社、二〇〇二年)三三頁。
- (26) 日本放送協会編『調査時報』昭和七、五、一五、但し『放送五十年史』（日本放送出版協会、一九七七年）資料編二八四頁。
- (27) 前掲『放送五十年史』資料編、六六四～六六五頁。
- (28) 前掲『放送五十年史』、六一～六二頁。
- (29) 前掲『放送五十年史』資料編、二八五頁。
- (30) Ref. B05015716700「第二～九画像目から」「本邦人満支視察旅行関係雑件／文化便宜供与関係第一巻」。但し満鉄については、発信者は坪上文化事業部長名である。
- (31) 上沼久之丞「訪満学童使節と国民教育」(『帝国教育』六一五号、一九三三年二月)一〇頁。
- (32) 「改正七位篠原義政位階追贈ノ件」Ref. A12090312900「第六画像目から」。
- (33) 篠原義政『満州縦横記』（改訂版）(国政研究会、一九三三年二月)、一頁。
- (34) 同右、九頁。
- (35) 前掲是澤「満州国承認と日本学童使節」参照。
- (36) 満鉄附属地は関東州以外に満鉄の沿線用地および停車場のある市街地で、この地域内では日本領事が裁判、外交権、関東庁が軍事、警察権をもち、満鉄が土木、教育、衛生などの施設を整備し、その費用を附属地住民から徴収する権限をもっていた。
- (37) 前掲篠原『満州縦横記』五八頁。
- (38) 同右、七九頁。
- (39) 同右、八〇頁。また前掲『満州国建国と五省の富源』も、迷信により行動する彼らの行動と銃器を三分の一ぐらいしか持たないことに触れ、「日本軍隊長曰く、大刀会、紅槍会匪の突撃には初年兵の実弾射撃の標的に又となき機会だ。…二十米の手頃の処に而も密集して数百或は数千も来るのだから盲目が撃つ鉄砲でも中る」(六〇七頁)、と記している。
- (40) 前掲篠原『満州縦横記』、二六頁。
- (41) 同右、二八頁。
- (42) 同右、二九頁。
- (43) 同右、八七～八九頁。
- (44) 前掲是澤「満州国建国と子供・少女と乙女の役割」参照。
- (45) 詳細は別稿に譲るが、とりあえず是澤博昭「青い目の人形と近代日本―洪沢栄一とレギュリックの夢の行方」(世織書房、二〇一〇年)二〇三～二一〇頁、参照された。
- (46) 『帝都訪問学童団記念写真帳』（大阪毎日新聞社、一九三四年二月一日）。
- (47) 李鍊「朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の創刊背景とその役割について」(『メディア史研究』二一(二〇〇六年二月)一〇一頁。
- (48) 『京城叢報』一五〇号(一九三四年三月)三八頁。
- (49) なおこれとはほぼ同じ内容が、『朝鮮』一二六号(一九三四年三月号)一四三頁に採録されている。
- (50) 前掲李鍊「朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の創刊背景とその役割について」一〇一頁。
- (51) 概要は、前掲「青い目の人形と近代日本」参照されたい。
- (52) 学童使節には男子も含まれているが、新聞社の当初の計画は少女使節答礼のための少女を中心に選抜する予定であり、学童使節も男子七名、女子八名と女子の方が多い。
- (53) 前掲江口『日本帝国主義史論』、一六四頁。
- (54) 是澤博昭『少年倶楽部』と日本学童使節―軍国少年少女の誕生」(『渋沢研究』第二九号)参照されたい。
- (大妻女子大学家政学部・国立歴史民俗博物館外来研究員)  
(二〇一六年一月六日受付、二〇一六年五月三〇日審査終了)

## **The Development of the Japanese Children's Mission into a Mass Campaign and Its Political Exploitation : Manchukuo and the Role of Boys and Girls**

KORESAWA Hiroaki

The Governments of Japan and Manchukuo, as well as the Kwantung Army, appreciated that friendly diplomacy between children from the two countries would be an effective way to proclaim the legitimacy of the Japanese invasion of Manchuria. There was also a need to improve public sentiment in Manchukuo, where anti-Japanese feeling was growing due to the reprehensible behavior of many of the Japanese immigrants. Therefore, the two governments greatly supported the Japanese Children's Mission.

The Children's Mission played an important role in the public relations of the Japanese Government by conveying messages from the Japanese Ministers of Education and Colonial Affairs and visiting leading figures in Manchukuo and the Kwantung Army. The Mission was also dispatched to Korea under Japanese rule for the Japanization of culture and politics there. Moreover, because it was dispatched to Manchukuo at the time Manchukuo was recognized by Japan as a country, the Mission was regarded as part of the celebration events and was more effective than expected because of this synergy. Eventually the Mission developed into a media event to swing public sentiment in favor of national strategies.

Later, as illustrated by another similar children's mission established to celebrate the birthday of the Crown Prince of Japan, this approach was further developed as a way to enhance the sense of belonging to the Japanese nation, while the boys took over the leading role from the girls.

Key words: Japanese Children's Mission, media event, Manchukuo, friendly diplomacy between Japan and Manchukuo, children